

12年3月21～27日に実施した。本12年度も継続して調査する予定である。

〔石塔等の写真測量〕

後陽成天皇灰塚 九重塔(京都市東山区今熊野泉山町)の現状を精細な測量図に記録した。

〔出土品の鑑定〕

新藤康夫氏(八王子市教育委員会事務局)に武蔵陵墓地(八王子市長房町)の出土品、寺沢薫氏(奈良県立橿原考古学研究所)に大市墓(奈良県桜井市箸中)の出土品の鑑定を依頼し、それぞれ平成11年8月18日、8月30日に実施した。その結果は、本誌第51号に報告した通りである。

## 磐園陵墓参考地墳塋裾護岸工事区域の調査

### はじめに

磐園陵墓参考地は、奈良県大和高田市大字築山の丘陵に所在する墳丘長約210mの前方後円墳である。奈良盆地西部の馬見丘陵に展開する馬見古墳群の南端に、主軸を東西に向けて位置する。本陵墓参考地の墳丘裾部も、他の濠水のある陵墓と同様に経年の波浪による浸食と崩落が進み、崖状ないし急斜面になってきたため、墳丘裾の布団籠による護岸工事が計画された。これに先だつて、施工予定地における遺構・遺物の存否とその実態、及び工法の検討に必要な所見を得ることを目的として、墳丘裾部に17箇所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。

調査は平成11年11月4日から着手し、同年12月4日に一旦終了した。その間、陵墓管理委員である網干善教・松井宗幸両氏にはそれぞれ考古学・土木工学の立場から現地を検分いただき、ご指導を賜った。その際の指摘により、平成12年1月12日から19日に追加調査を行った。なお、各トレンチにおいて検出した葺石については奥田 尚氏に鑑定いただいた。その結果については後掲する。

また、出土遺物のうち中近世の遺物については、大和郡山市教育委員会山川 均氏よりご教示賜った。冒頭に記して感謝申し上げる次第である。

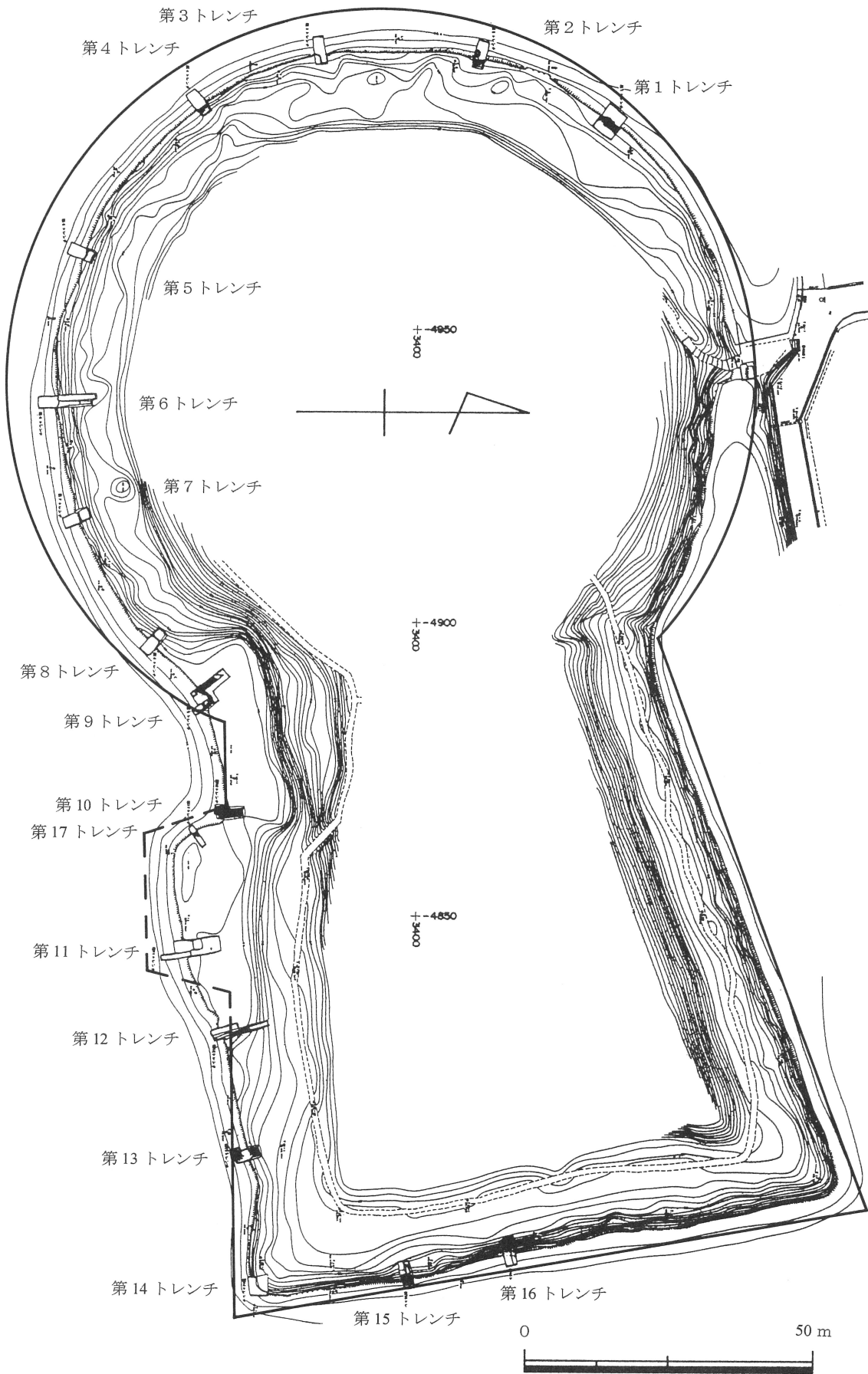
### 1 トレンチの設定方法と基本的な層序

トレンチの配置は第1図のとおりである。本陵墓参考地では、本誌49号に報告したとおり、平成8年度に、墳丘北側を中心にトレンチを設定、調査している。そのため、本調査ではその際の調査範囲を除いた区域、すなわち後円部北西部付近から墳丘南側を巡り、前方部正面中央付近までの区域に計17箇所のトレンチを設定した。各トレンチは長さ5m×幅2mまたは長さ5m×幅5mを基本としたが、調査状況に応じて適宜変更して調査を行った。

調査した各トレンチにおける基本的層序は次のとおりである。

I層 表土。黒褐色の腐植土。

II層 浚渫土による盛土。多くのトレンチで表土の直下に認められる粘質土層。灰褐色の粘土ブロックを多く含み、濠の浚渫土を盛り上げたものと考えられる。



第1図 磐園陵墓参考地調査箇所位置図および墳丘推定復元図 (1/1000)

III層 中世から近世にかけて形成されたと考えられる盛土層。4つに分けられる。III a層は多くのトレンチで認められ、出土遺物の状況から近世以降と考えられる。盛土の中ではもっとも新しい時期にあたる。

III b～III d層については、墳丘の改変に伴って形成されているため、明確に認められるトレンチは限定される。出土遺物や鍵層の存在から共通した様相が把握できるのは、第9～12トレンチ付近に顕著に認められる盛土である。具体的には、10トレンチで検出された大甕を削平した後に新たに盛土したもの(III b・III c)と、その大甕の設置段階の中世末期(III d)とに分けられる。大甕の削平が中世のうちになされたのか、それ以後であったのかは判断する材料に乏しく、厳密に言及できない。

III b～III d層の詳細は第9～12トレンチの調査所見で述べることにする。

IV層 濠内堆積土。暗灰色の粘質土が中心である。築造当初の堆積土はどのトレンチでも確認されなかった。ヘドロ化した現在のもの(IV a)と、III c層以後に形成されたもの(IV b)とIII d層以前に形成されたもの(IV c・IV d)に分けられる。いずれも砂を含む暗灰色の粘土を中心とする。IV c層には墳丘の削平に伴い崩落した葦石石材・埴輪片が多く含まれ、鉄分の沈殿が顕著である。IV d層はIV c層とは対照的に遺物を含んでいない点に特徴がある。IV b～IV d層の性格については後述する。

V層 葦石を覆う、築造後間もない段階での崩落土。灰褐色あるいは黄褐色の砂質土である。薄く葦石全体を覆う。

VI層 墳丘盛土。地山を掘削して盛土したと考えられる黄褐色土のほか、赤褐色の粘質土も多く用いられている。

VII層 地山。黄褐色粘質土で、調査箇所内では、おおむね標高64.000～65.000mの間に検出された。

## 2 各トレンチの状況

### 後円部

後円部は、現状で最大径約120mの4段築成である。第1段テラス面が幅10m強を測り、第2段より上のテラス面に比べ、かなり幅広い点の特徴である。墳頂平坦面は径約25mを測る。後円部墳頂から前方部墳頂に至る鞍部はやや急なスロープを形成している。また、第1段はやや等高線に乱れが認められるが、第2段より上では、基本的に均整な等高線が巡り、一見したところでは大きな改変は加わっていないように見受けられる。

段築は比較的明瞭に認められる。第2段テラス面には、埴輪片が集中的に散乱する箇所も見られるため、埴輪列が遺存していると考えられる。

第1トレンチ(第2図1) 後円部北西に長さ5m×幅5mで設定した。表土(I)の下に浚渫土(II)が認められ、葦石を覆う砂質土(V)に至る。その下に葦石が検出されたが、濠側は浸食、斜面上方は削平により既に失われていた。削平面を精査したところ、墳丘盛土の単位も平面的に確認された。葦石の詳細については後述する。



第3～5トレンチ（第2図3；第3図4・5） 後円部西から南西に設定したこれらのトレンチの土層は、基本的に第1・2トレンチと同様の堆積状況を示すが、葺石については第4トレンチで辛うじて残骸が確認されたほかは、既に失われていた。

第3トレンチでは墳丘盛土(VI)に断ち割りを入れたところ、赤褐色を呈する非常に堅緻な砂質土を、厚さ20cm前後の単位で盛り上げている。第5トレンチでは、奥壁に沿うようにVI層を掘り込んだ溝を確認した。溝の掘削時期を出土遺物から特定することはできない。

出土遺物は、3トレンチ分で約130点と、全体に出土量は少ない。出土の傾向は第1・2トレンチと同様である。各層とも各種遺物が混在している。

第6トレンチ（第3図6） 後円部南の墳丘主軸に直交する位置に設定した。当初長さ5m×幅2mで設定したが、本来の墳丘の遺存状況を確認するため最終的に長さ9m×幅2mに変更し、東半分を最大1.7m掘り下げた。その結果、葺石も含め本来の墳丘斜面は大きく削平されていることが判明した。

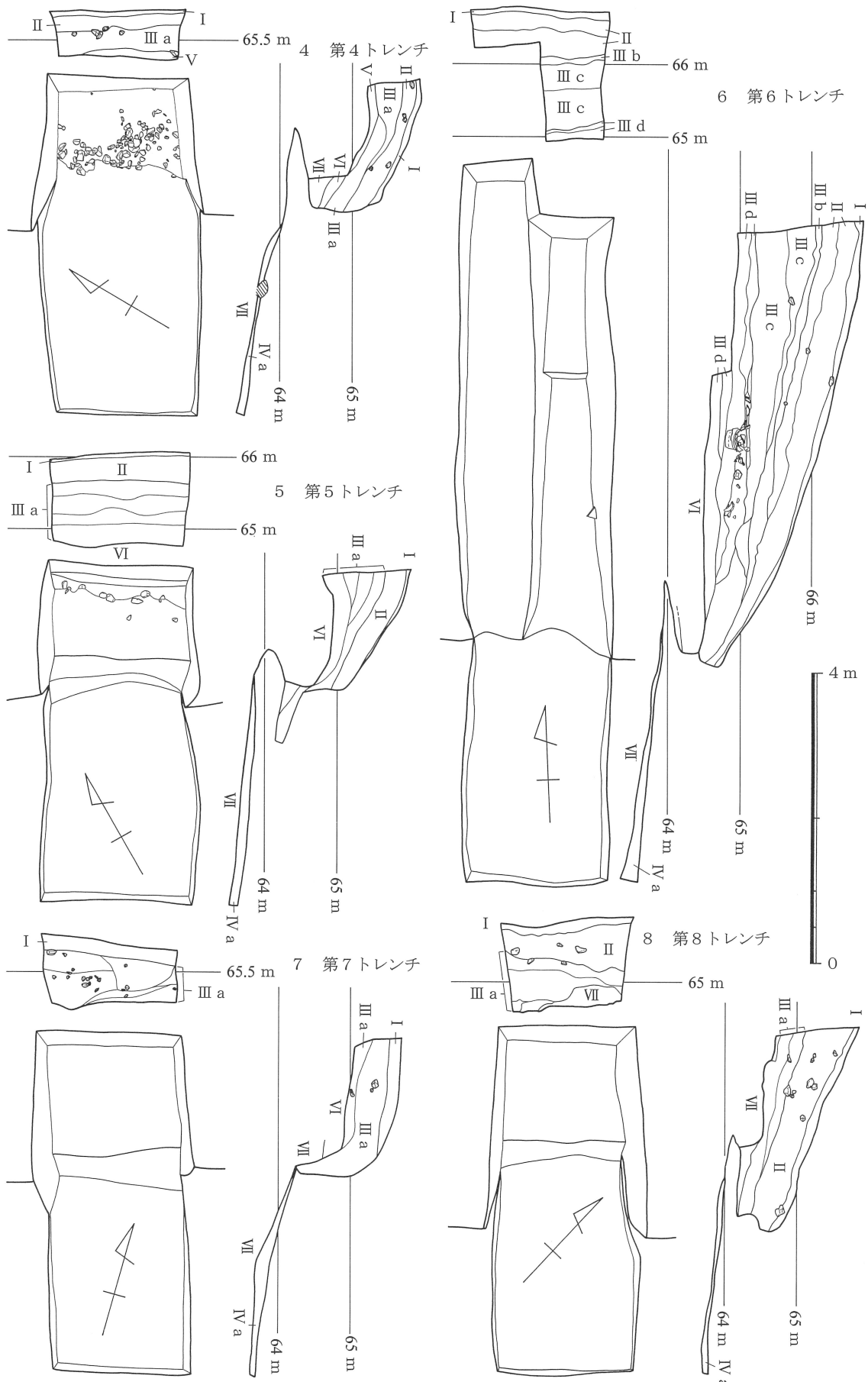
表土(I)の下に浚渫土(II)があり、その下位に旧表土2層を挟み、3層の盛土が確認された。上からそれぞれIII b・III c・III dの各層に対応すると考えられる。III b層は黄褐色の均質な砂質土で、この層から滑石製紡錘車形石製品(第18図1)などが出土している。III c層は黄褐色の堅緻な粘質土である。埴輪片を少し含んでいる。III d層は、暗茶褐色の粘質土である。この層からは多くの埴輪片が、大量にかつ均一なレベルで出土している。ただし、これらの埴輪片は、全て原位置をとどめておらず、あたかもある一時点において投棄されたかのような状態である。特に、第12図14に示した鱗付円筒埴輪は、ほぼ一個体分がある程度原形を留めていたにもかかわらず、基底部を失っており、斜めに倒壊しかけたような状況で出土した。埴輪のほか、葺石石材と思われる小礫も多数検出されている。おそらく、最初に墳丘に対し大幅な改変が加えられた時点では埴輪列が良好に遺存しており、それらが比較的まとまった形で投棄されたような状況を考えることができよう。

最終的に、ほぼ水平に削平された赤褐色粘質土の墳丘盛土(VI)を確認した。この層には、埴輪片はもちろん、直上の層で検出された小礫も含まれていない。遺構は検出されなかった。

出土遺物は約1100点にのぼり、大半は円筒埴輪片で、わずかに形象埴輪片が含まれる。埴輪片は上位の層から下位の層までまんべんなく出土している。瓦質土器や瓦片は総数からすればごくわずかで、比較的上位の層となる盛土(III b)からの出土が多く、下位になるほどその数を減じていく。

第7・8トレンチ（第3図7・8） 後円部南東に、ともに長さ5m×幅2mで設定した。表土(I)の下に、第7トレンチでは盛土(III a)・墳丘盛土(VI)、第8トレンチは盛土(II)・盛土(III a)・地山(VII)と続き、墳丘の破壊が著しい。盛土内には葺石石材と思われる礫が散見される。特に、第8トレンチは墳丘盛土(VI)をまったく残さないほど深く掘り込まれIII a層を除去したところで地山に到達した。遺構は検出されなかった。

出土遺物は第7トレンチが約100点で、円筒埴輪の比率が高く、土師器・瓦・瓦質土器が少しづつ含まれる。第8トレンチは約220点で、傾向は第7トレンチと同様である。遺物は両トレン



第3図 磐園陵墓参考地 トレンチ平面図および断面図(2) (1/80)

チともⅢa層からの出土が多く、第8トレンチではⅡ層からも少量出土している。

後円部の状況をまとめると、第1段テラス面は現状で幅広いものとなっているが、各トレンチの状況から判断する限り、本来のテラス面が残っている可能性は低く、幅も、どの程度本来の広さを反映しているか問題があろう。葦石も第1・2トレンチで検出されたのみで、その他では確認されなかった。特に第6トレンチなどは、一度大規模に削平された後、数度の盛土によって、現状での見かけのテラス面・墳丘斜面が形成されたことが判明した。

#### くびれ部

くびれ部は全体図で明らかなように、墳丘第2段斜面付近まで大きく削られ、同様の状況は前方部の途中、第12トレンチの背後付近まで続く。その前面に、おそらくは削り出した土を利用して広範に平坦面を作り出している。

第9トレンチ（第4図9） 現状のくびれ部とそこに広がる平坦面に、当初長さ7m最大幅4mで設定した。追加調査で濠側へ長さ1m幅1m拡張し、拡張分も含め、長さ2m分を濠底確認のため掘り下げた。

遺構として、地山を掘り込んだ後、土あるいは土石混交で埋め戻した地業と葦石を確認した。上から順に述べると、表土(Ⅰ)の下に盛土(Ⅲb)を検出し、それを取り去った面で地山と地業上面を確認した。これにより、平坦面の形成にあたり、墳丘盛土はもちろんのこと、地山まで大きく掘り込んでいることが確認された。

なお、Ⅲb層下位の薄い層(ア)は、第10トレンチのⅢb層下位の薄い層(イ)と同色同質の土であり、鍵層として、両トレンチの土層の対応関係を考える際、重要である。

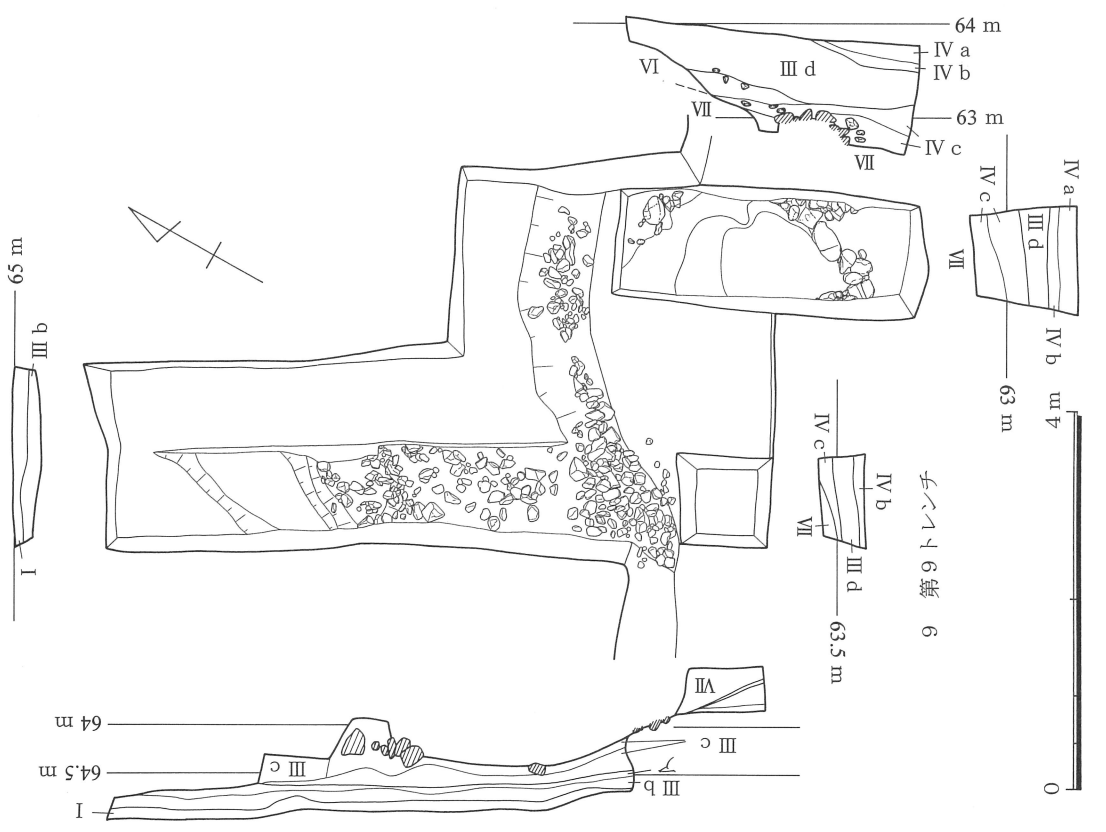
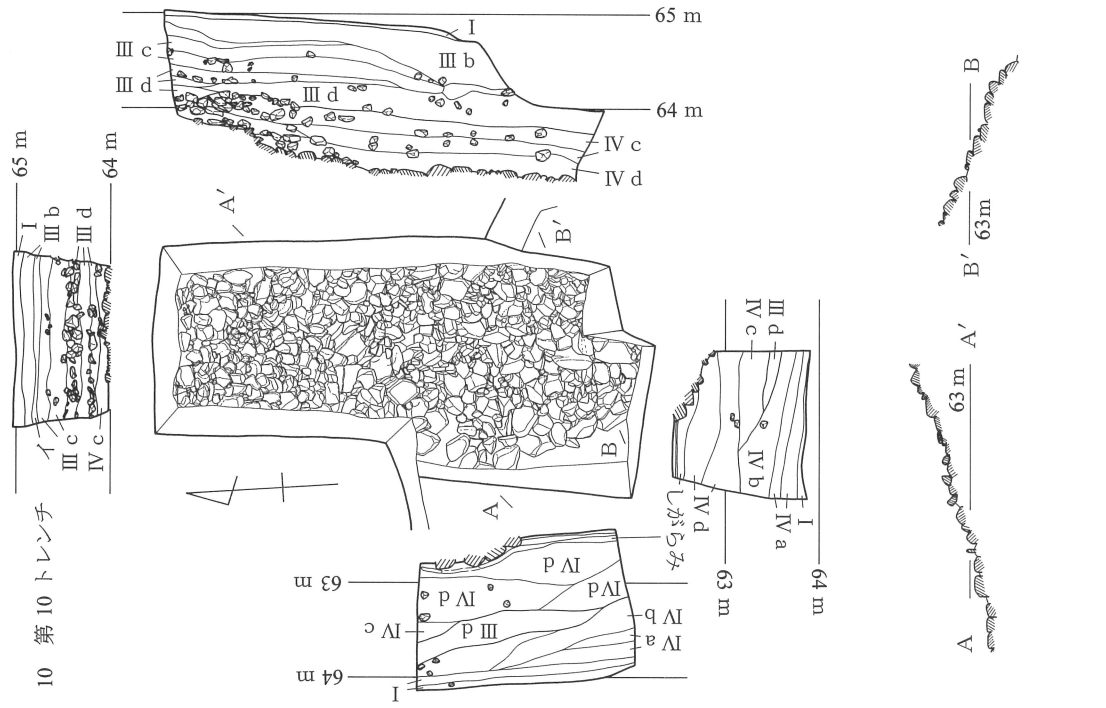
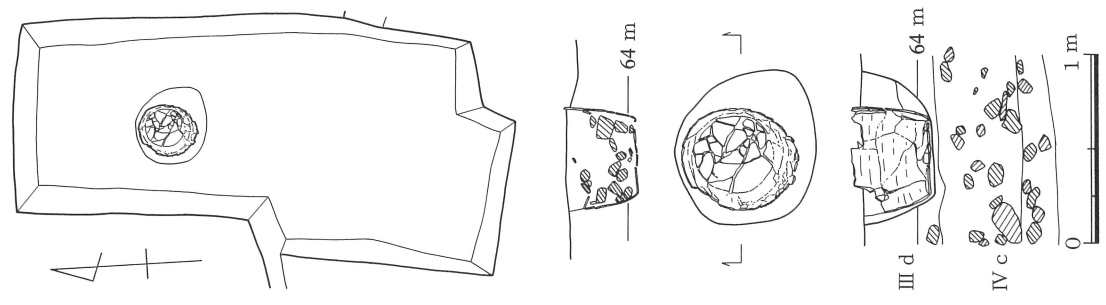
断面から観察する限り、地山への掘り込みは2回に分けられ、結果的に階段状に削られている。この2時期に分けられる掘り込みの埋土は古い方には石が含まれず、新しい方には石が含まれているという違いは指摘できるが、明確な時期および両者の時期差は決めがたい。しかし、濠側へ拡張したトレンチで、削られた後円部の斜面を検出し、そこにⅢd層の堆積が確認されたことから、この地業とその埋土はⅢc層に対応するものと考えられる。この地業埋土は現状のくびれ部にほぼ沿う箇所では石積みとして検出された。よって、現状のくびれ部はⅢc層の段階で形成されたものと考えられる。

濠側への拡張区では、現在の濠内堆積土(Ⅳa)の下にⅢd層が認められ、その下に葦石が検出された。しかし、わずかに列状に残るのみで大規模に破壊されている。本来の後円部裾も残っていなかったが、第10トレンチの葦石基底レベルと20cm程度の違いであり、墳丘裾の位置は大きくは変わらないと言える。

出土遺物は、約450点出土したが、円筒埴輪の比率が高く、土師器・瓦・瓦質土器が少しずつ含まれる点で、第8トレンチまでの傾向と同様である。多くはⅢd層からの出土であり、Ⅲb・Ⅲc層からの出土は少ない。各層とも各種遺物が混在している。

#### 前方部

前方部は、現状で3段築成であり、後円部と同様第1段テラス面の幅が広い。くびれ部に設定した第9トレンチ付近から、第12トレンチ背後までの約70mにわたり大規模な削平を受けている。



第4図 蟹園陵墓参考地 トレンチ平面図および断面図(3) (1/80)

さらに、第10～12トレンチ間は南側に約10～20m張り出しており、造出である可能性も考えられていた。

第10トレンチ（第4図10） 前方部南側の張出部と前方部側面との屈曲部に、長さ5m×最大幅2.5mで設定した。最終的に前方部と造出との屈曲部にあたる葺石を検出し、造出と本来の墳丘裾の存在を確定する成果が挙げられたが、それ以外に葺石を破壊して以降の複数時期の盛土を確認した。その盛土からは大甕設置遺構や年代推定の手がかりとなる遺物の検出など、本陵墓参考地における人為的痕跡が確認されており、本トレンチの土層が各トレンチの基本層序にもなる。

表土(I)の下に、第9トレンチで確認されたものと同じ盛土(III b)、その下のIII c層を経て、III d層上面で削平された状態の大甕設置遺構を検出した(第4図10)。これによりIII c層はIII d層削平後新たに盛土されたものであることがわかる。また、III d層より下位は濠内堆積土(IV)であるが、トレンチ内でのIII d層は濠内堆積土をすべて埋め尽くしている。これは、少なくともIII層に相当する一連の盛土が、何らかの目的のもと平坦面の確保と拡張のために、現状で確認される前方部の地形の改変に絡むかたちで行われたことを示すと言えよう。

濠内堆積土は、IV a・IV b層を確認したのちIV c・IV d層にいたるが、IV c層はIII d層形成時の濠内堆積土であり、大量の葺石石材・埴輪片・中世遺物を含んでいることから、III d層の形成以前に、既に墳丘の改変が始まっていた可能性がある。鉄分の沈殿も顕著に認められ、この層の比較的上位から、第17図53に示した景德鎮系の磁器碗が出土している。この層の形成時期は、出土した播鉢や土釜(第17図48～52)の特徴から中世後半期、おおむね16世紀後半頃と考えられる。

IV d層は遺物を含まない点に大きな特徴がある。また、濠底にあたる標高62.5m～63mに堆積する暗茶褐色粘土から、しがらみが葺石に向かって倒壊し、パックされたような状況で出土した。その上位には、葺石上に薄く粘土や砂が堆積する状態が認められる。濠底では地山を検出した。

葺石に絡むかたちで出土したしがらみについては、IV d層が遺物を含まないことから、IV c層で推定される16世紀後半以前という以外、具体的な年代を示すことはできない。しかし、IV c層からかなりの形象埴輪片等、くびれ部や造出上に樹立されていたと思われる埴輪片が出土したのに対し、IV d層では皆無である。また、IV c層の埴輪片も中世遺物と混在する状況であった。このことから、墳丘裾のしがらみは、築造当初のものではないと考えて差し支えない。併せて、築造当初の堆積土も残っていないと判断できる。

この状況をみる限り、しがらみを墳丘裾に沿って設置していた段階では、濠底まできれいに浚渫され、さらには葺石面が地表に露出しており、ある種の維持・管理がなされていたとさえ思わせる。また、地山直上に青灰色粘土が薄く堆積しており、この時点での滞水はわずかであったと考えられる。これが如何なる理由によるものかは不明と言わざるを得ないが、いずれにしても、しがらみの設置とV層が確認されない点、およびIV d層に埴輪などの遺物が一切含まれないというこれらの事象は全て関連すると考えられる。

なお、IV層については滞水の痕跡が確認されたため濠内堆積土としたが、堆積状況やしがらみの倒壊状況などから、盛土の可能性があり、その場合中世における本陵墓参考地に対する改変はさらに遡る可能性があることも付け加えておきたい。

以上が層序に沿った状況であるが、先述のとおり本トレンチでは、大甕設置遺構と葦石を検出している。大甕設置遺構の詳細は第4図10に示した。直径80cmの円形掘り方内にはほぼ全体を埋めていたと考えられる。土砂とともに底までかなりの量の葦石石材が含まれていた。一気に埋まった状態にあるため、埋没直前までは使用されていたと考えられる。また、底面からは土釜の破片が出土している。これと同様のものが第2トレンチの井戸からも出土しており、他の時期の遺物が認められないので、年代的にも近いことが想定される。この甕の用途については、内面の付着物の脂肪酸分析を行った結果、肥溜めとして使用された可能性が高いという。

葦石は、前方部と造出西面の屈曲部にあたる箇所を検出した。裾は一部基底石が動いている状況が認められるが、おおむね良好に残っている。上部はトレンチ外となるため不明だが、先の墳丘の改変に伴い天端付近は既に失われている可能性が高い。屈曲部は目地となる石列が明瞭に認められる。第1・2トレンチに比較すると全体に大きめの石の使用が目立つ。葦石の詳細については後述する。

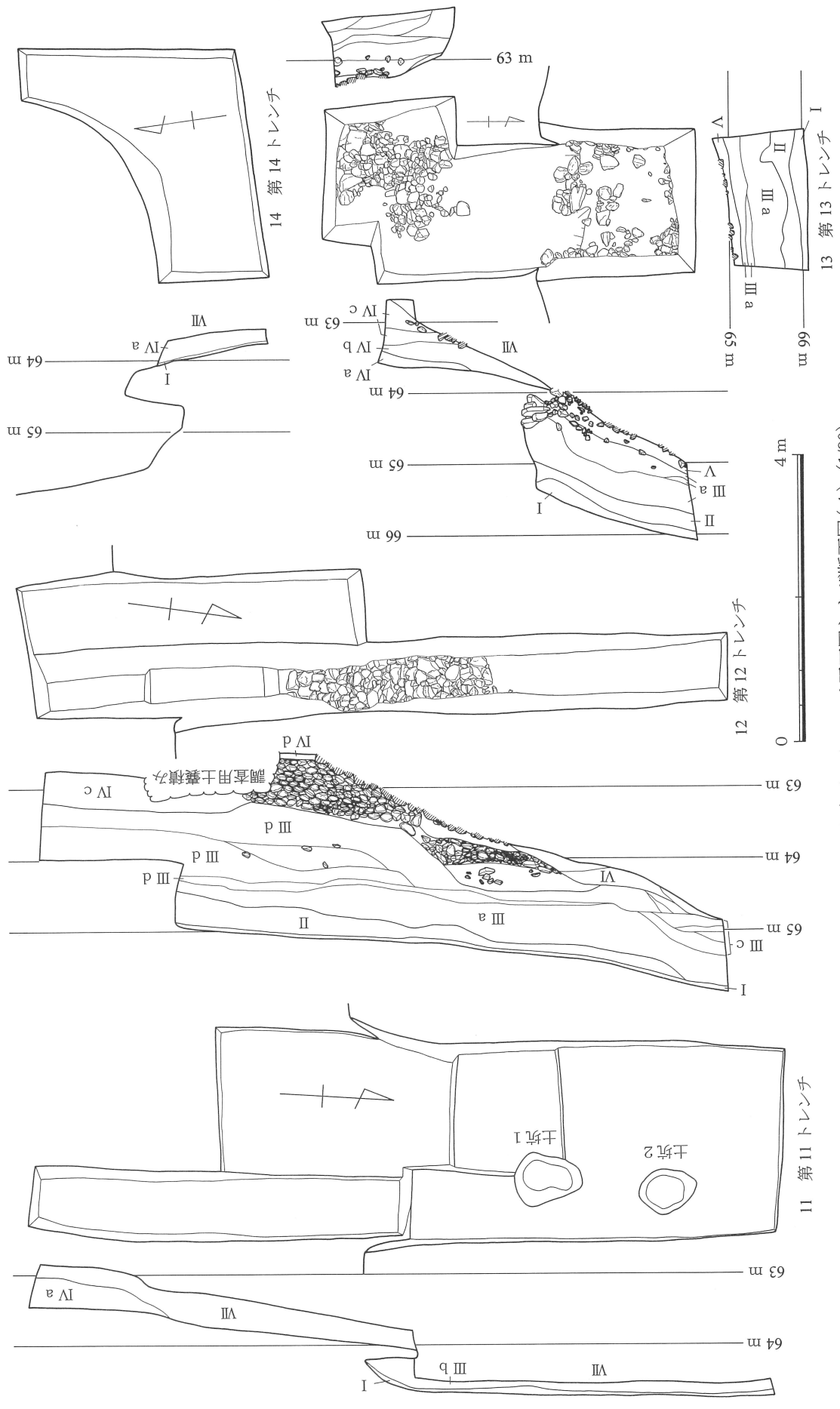
出土遺物は約1650点出土した。大規模な改変が加わった場所だけに、出土量は他のトレンチをはるかに凌駕する。出土の傾向は圧倒的に埴輪が多く、出土量だけではなく種類も豊富で、造出付近ということもあるが、本陵墓参考地における埴輪の器種構成を反映していると言えよう。IVc層からの出土がもっとも多いが、その上位の層でも比較的大きな破片が出土しており、盛土のたびに各層に混入したものと考えられる。中世遺物も量は少ないものの、全形を窺い知ることのできる資料は多い。埴輪同様、IVc層からの出土が多く、上位の各層からも出土している。

**第11トレンチ (第5図11)** 地形図を見てわかるとおり、造出の存在の可能性も考えられていた、前方部南側面に大きく張り出す平坦面の濠際に設定した。現地表下0.3m程度で地山(VII)に到達し、そこで土師器のミニチュア(以下、ミニチュア土器)を納めた、平面が長楕円の土坑2基を検出した。この検出面は一面平坦であるが、周辺の削平の状況から考えると、本来の造出上面と考えるのは難しい。地山の上には薄く堅緻な盛土(III b)が確認でき、第10・12トレンチで確認された造成と同様のものと判断できる。土坑以外の遺構は検出されなかった。

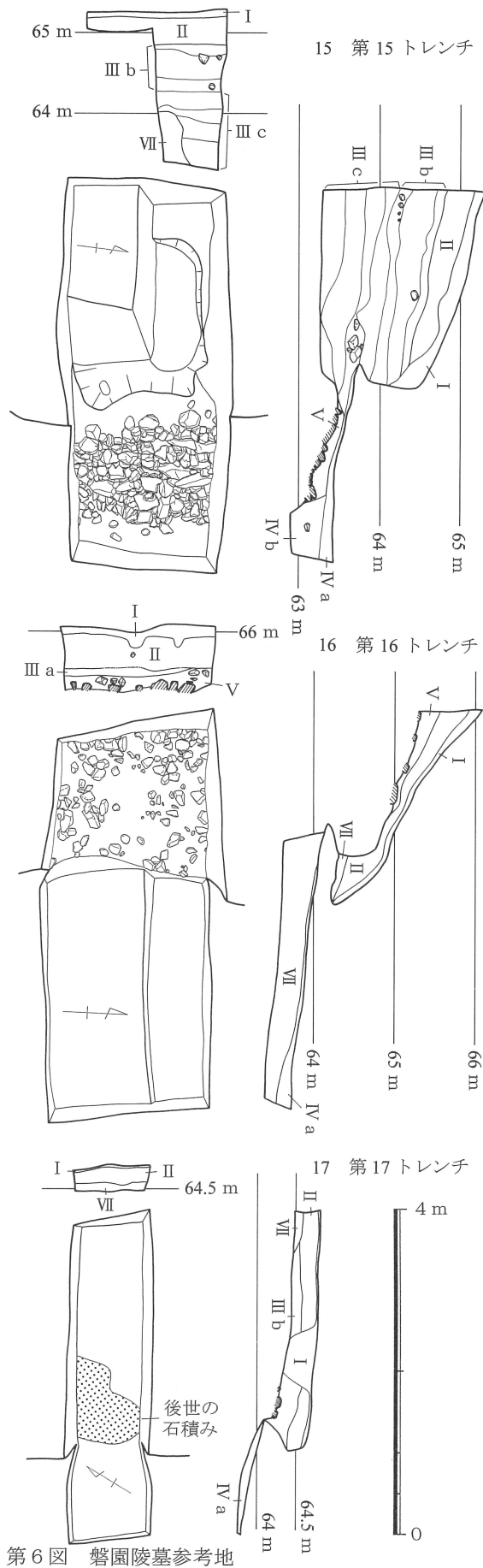
土層断面を見ると、地山は造出先端(南)に向かって、現在の濠際から3.5mの地点で下降し始める。現濠内は表土直下が地山であり、このことから下降し始める地点までは本来の造出上面が伸びていたと解される。本来の平坦面もろとも斜面が大きく削られていると考えられる。以上のことから、前方部南側の張出部は、本来の造出をある程度反映していると言えよう。西面は葦石の存在から本来の形状に沿っていると思われ、南面に関しては、現状より大きかったと考えられる。東面は屈曲が弱く判然としないが、第10トレンチで確認された墳丘裾の屈曲から、本来の造出は、平面台形を呈するものだったと考えられる。土坑の詳細については後述する。

なお、造出付近には、それほど顕著ではないものの、白色円礫が散見される。本来造出上面に敷かれていた可能性を指摘しておきたい。

出土遺物は、土坑1から7点(第16図37~43)、土坑2から2点(第16図44・45)のミニチュア土器の他、約180点が出土した。埴輪が大半を占め、中世遺物は極めて少ない。III b層からその大半が出土した。



第5図 磐園陵墓参考地 トレンチ平面図および断面図(4) (1/80)



第6図 磐園陵墓参考地

トレンチ平面図および断面図(5) (1/80) に露出しながらもよく保存されていた可能性が

第12トレンチ (第5図12) 前方部南側張出部の東側基部に長さ9.5m×最大幅2mで設定した。本トレンチでも大規模な盛土や墳丘改変の痕跡を確認している。

表土(I)・浚渫土(II)に続き、盛土(III a・III c)を確認した。その下に最大で厚さ1mにおよぶ盛土(III d)があるが、断面の状況からIII d層はいったんほぼ水平に削平された後、III c層が盛られ、さらにそれをも削平してIII a層が盛土されていることがわかる。III d層の上面が削平されていることは、第10トレンチの大甕の削平状況に一致する。また、この削平面の一部に旧表土層が確認されており、削平されてはいるものの、標高64.5m付近が中世末期の生活面であったことが知られる。

濠内堆積土(IV c・IV d)はIII d層に埋められているが、IV c層の大きな特徴は、葦石石材が大量に投棄され、集積したような状態にあることである。最大で厚さ約70cmにおよび、上半部に鉄分の沈殿が顕著である。第10トレンチの記述でIV層が盛土である可能性を指摘したが、本トレンチの場合、III d層の形成前に、墳丘盛土まで削り取るような大規模な改変が加えられたことが推定される。その後、南側に粘土の堆積土(IV c)が形成されていることから、墳丘の改変後、III d層の形成までにはしばらく時間があいたと考えられる。上述の葦石石材の中には埴輪片等の遺物が多く含まれていた。

なお、最終的に葦石と、濠底でごく薄いIV d層を確認した。葦石は標高63.8m付近から上は既に削平されていた。葦石上にV層はなく、IV c層の葦石石材が堆積しており、IV d層から遺物の出土はなかった。これは、第10トレンチの葦石直上の状況と極めてよく似ている。本トレンチにおいても、墳丘改変までは、葦石は地表

高い。トレンチ北側の葺石削平面には墳丘盛土を確認した。葺石の詳細については後述する。

出土遺物は約400点である。埴輪の比率が圧倒的に高く、各層から出土したが、IV c層からがもっとも多い。墳丘改変の痕跡が認められるにもかかわらず、中世遺物はごく少量である。III d・IV c層からの出土が多い。

**第13トレンチ (第5図13)** 前方部南側面に、長さ5 m×最大幅2.5 mで設定した。本トレンチ付近は現状の墳丘裾に崩落した葺石石材が多く認められていた。

表土(I)・浚渫土(II)の下に厚く盛土(III a)が堆積し、葺石を覆う原初の崩落土(V)と思われる土を検出した。しかし、葺石自体の残りは悪く、早い段階で崩落してしまった可能性が高い。現在の濠内でも、トレンチ南壁周辺に辛うじて葺石を検出したが、全体的にみると大きく破壊されていた。ただし、南壁に沿うものは、そのレベルからもほぼ墳丘裾と考えられ、第10・12トレンチと合わせ、本来の墳丘規模を推定する手掛かりを得た。

出土遺物は約100点を数えるが、埴輪の比率が高く、瓦質土器が少量含まれる。IV b・IV c層から各種遺物が混在して出土している。

**第14トレンチ (第5図14)** 前方部南側隅に長さ2 m×幅2 mで設定し、結果的に濠際部分を変則的に1.5 m×1.5 mの範囲を試掘した。薄い表土(I)の下に、地山が水に洗われて形成された濠内堆積土(IV a)が確認されており、事実上地山(VII)が露出している状況にあると言える。本トレンチの設定箇所は、第10・12・13トレンチの葺石で結べる墳丘裾からは明らかに内側に入っており、築造当初の墳丘裾はかなり南側にあると考えられる。

出土遺物は、埴輪片・土師器片計4点がIV a層から出土したのみである。

**第15トレンチ (第6図15)** 前方部正面の南半部に長さ5 m×幅2 mで設定した。表土(I)・浚渫土(II)の下に、盛土(III b・III c)が確認された。III b層には拳大の礫が含まれている。III c層は、墳丘盛土まで大きく掘り込んだ土坑を埋めつつ盛土されている。その土坑(III c層内)には、第10トレンチで出土した大甕と同種の破片がかなり含まれていた。くびれ部周辺だけではなく、墳丘各所に中世の生活痕跡が点在し、また墳丘改変の手が及んでいることが推定できる。

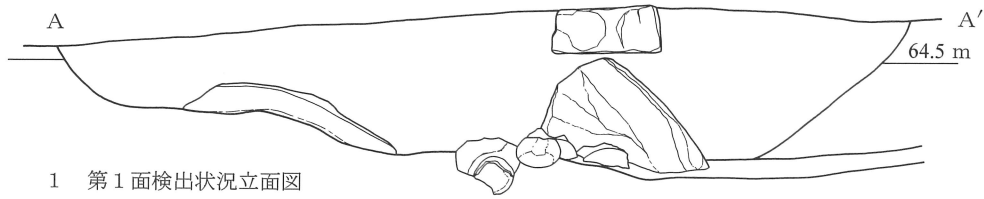
本トレンチにおいても葺石を検出したが、先述の土坑のため墳丘側は既に失われ、濠側も裾部分は既に削られていた。残存面の上にもV層が認められる。葺石の詳細については後述する。

出土遺物は約200点におよぶ。基本的に、他のトレンチでは埴輪の比率が高いが、本トレンチでは瓦質土器を中心に、中世遺物の比率が高い点に特徴がある。第15図29の家形埴輪片はIII b層から出土している。

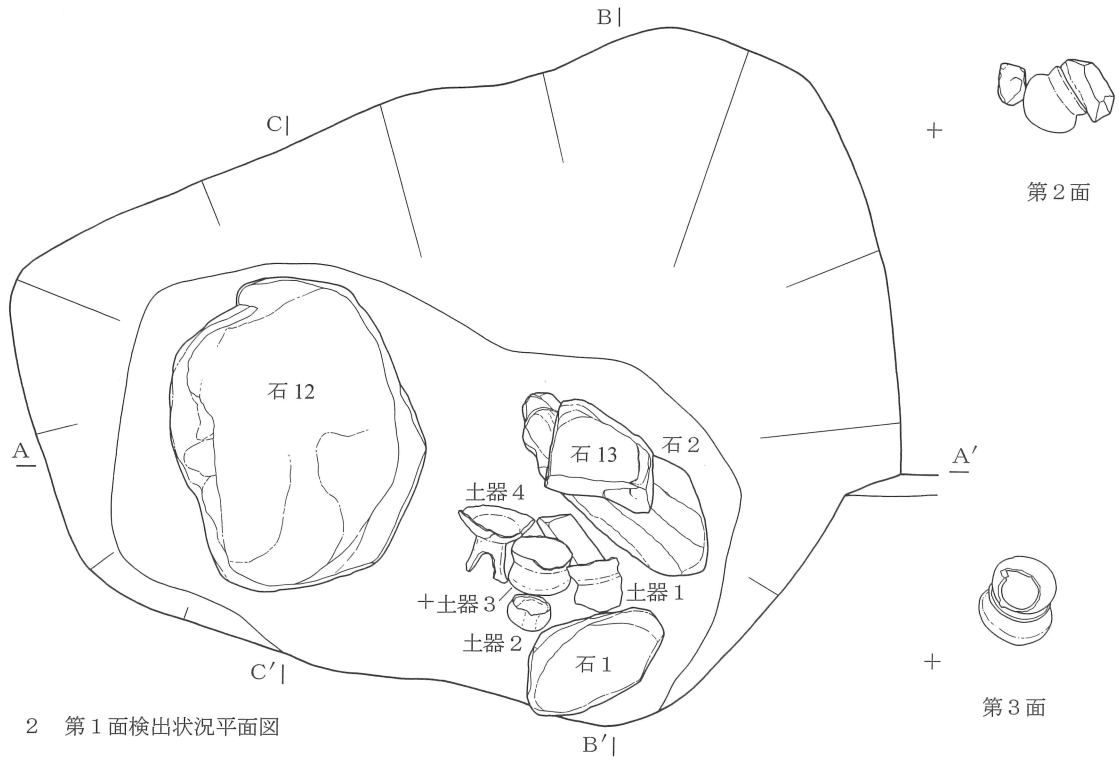
**第16トレンチ (第6図16)** 前方部正面の南半部、墳丘主軸のやや南に長さ5 m×幅2 mで設定した。表土(I)・浚渫土(II)の下に、葺石を覆う初期の崩落土(V)を確認したが、葺石自体は早い段階で崩落してしまったためか、残存状況は悪い。また、現在の濠際より下では、現濠内堆積土(IV a)の直下で地山(VII)に到達するため、葺石は既に失われていることがわかる。

出土遺物は、24点と他のトレンチと比較すると少ない。埴輪の比率が高く、瓦質土器が少量含まれる。II層とIV a層から混在して出土している。

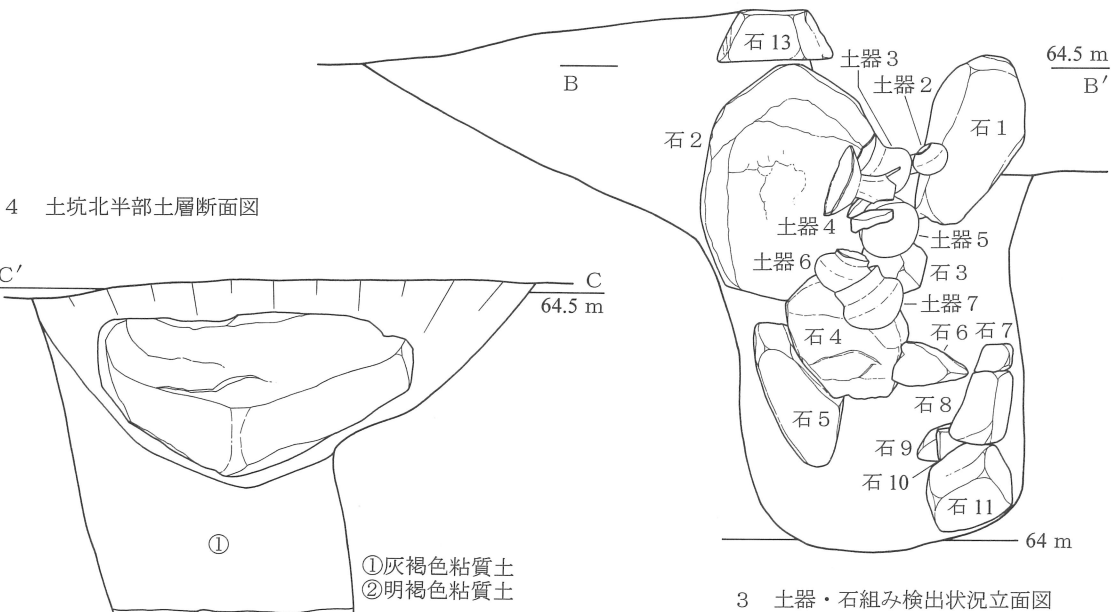
**第17トレンチ (第6図17)** 第10・11トレンチの間に長さ4 m×幅1 mで設定した。表土



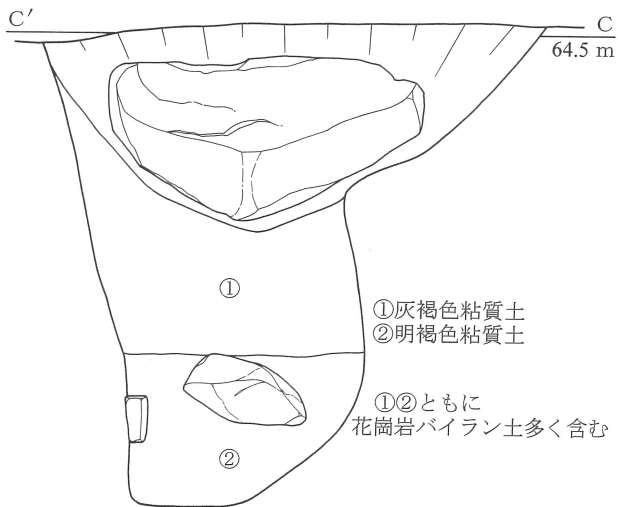
1 第1面検出状況立面図



2 第1面検出状況平面図



4 土坑北半部土層断面図



①灰褐色粘質土  
②明褐色粘質土

①②ともに  
花崗岩パイラン土多く含む

3 土器・石組み検出状況立面図

1・3・4の土器と石はすべて見通し図



第7図 磐園陵墓参考地第11トレンチ土坑1詳細図 (1/8)

(I)・浚渫土(II)を経て、トレンチ最奥部で地山(VII)が確認され、それがすぐに濠側に潜り込んでいく状況が観察された。潜り込む地山の上にはIII b層が堆積する。本トレンチは造出の形態を知るための参考に設定したため、地山の落ち際を上面確認するだけにとどめた。

出土遺物は約60点で、円筒埴輪の比率が高く、土師器・瓦・瓦質土器が少しずつ含まれる。遺物は各種混在しており、主としてIII b層から出土した。

### 3 調査成果の詳細

#### (1) 造出のミニチュア土器埋納坑について(第7・8図)

第11トレンチで検出された2基の土坑において、土器の埋納が明らかになったので、以下その詳細を述べていきたい。

**土坑1の状況(第7図)** 段階的に土器を納めている状況が観察されたので、土坑の掘削から土器を納めていく過程を復元的に記述することとしたい。出土した土器7点は6点の壺(第16図37~39・41~43)と1点の高杯(第16図40)で構成されている。

(第1段階) 土坑の掘削。平面が長径約90cm×短径約70cmの長楕円で、壁はややオーバーハングしながらほぼ垂直に立ち上がる、現状で深さ約50cmの土坑を掘削する。掘削後、石組とともに土器が納められるが、土坑の大きさに比して、土器や石組みが南半分に偏っている。北半分の空間は、均質な粘質土が充填され、その中から脈絡のない状況で石が数点出土した。有機質の遺物が納められていたような痕跡もないため、埋納空間としては使用せず、単純に埋戻しただけだと考えられるが、埋戻しが先に行われたか、石組や土器の埋納と並行して行われたかについては、判断する材料に乏しい。ただ、北半分と南半分では埋土に違いが認められることから、北半分が先に埋戻された可能性は考えられる。

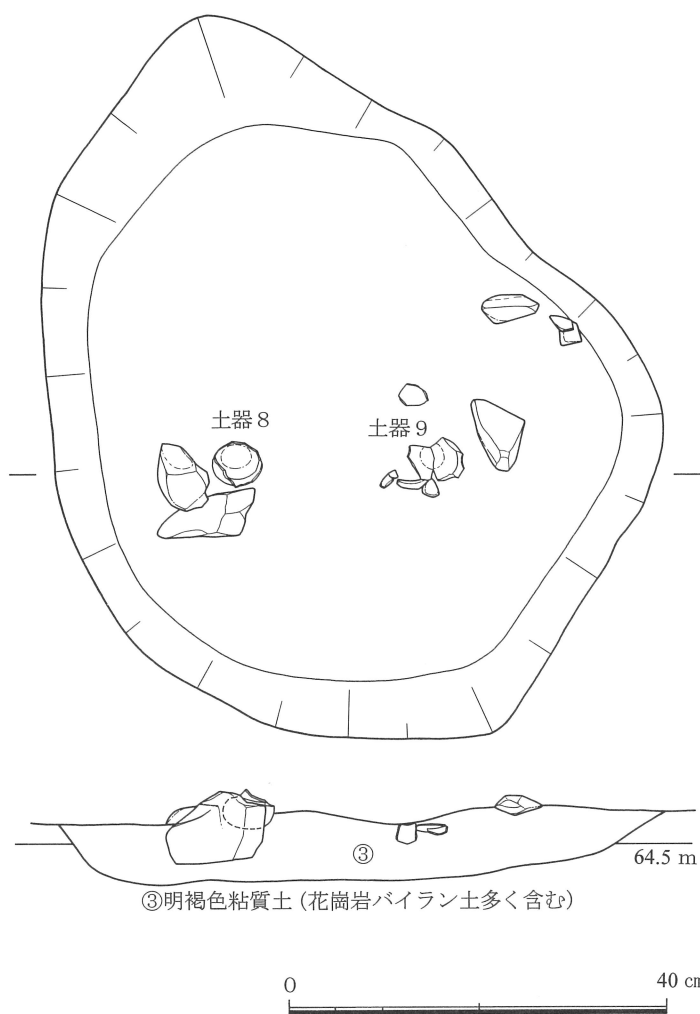
(第2段階) 土坑底面の埋戻し。この土坑底面に直接土器が置かれたわけではない。第7図3をみるとわかるように、土器は底面から約25cmのところでは置かれ、その下は北半分同様、均質な粘質土で埋戻されていた。深さの調節のためとも考えられるが、石組みは既に設置されており、土器の埋納を始めた時点では石4の下半部から石11で構成される石組みは見えなくなっている。ここも北半分と同様、何らか有機質の遺物が納められていたような痕跡は確認されなかった。

なお、石7~11は土坑西壁に、石1~6は南壁に設けられており、区別が認められるが、土器の埋納面とは対応しない。

(第3段階) 第3面土器の埋納。土器はまず、6・7が納められる。両者とも広口壺である。斜めに置かれた土器7の口縁部に土器6の胴部をはめ込んだような状況で検出された。石組みは第3面の埋納時点で石2までは組み上げられていたと考えられる。

なお、土器埋納を始めてからの埋戻し土は、粘性は強いものの花崗岩バイラン土を多く含む土に変わる。しかし、各面の土器の埋戻し土ごとの違いは明確には認められず、細かい分層は困難な状況だった。

(第4段階) 第2面土器の埋納。第2面は土器5の1点のみである。横倒しに近い状況で、口縁部と底部付近に石が接する状態で検出された。特に、口縁部の石はあたかも蓋をしているかの



第8図 磐園陵墓参考地第11トレンチ土坑2詳細図 (1/8)

この段階で、土坑北半部に石12が置かれたものと考えられる。

(第6段階) 土坑の最終的な埋戻し。石組みと土器の関係などから、土器の埋納がさらに上に続いていった可能性は低いと考えられる。特に石13の位置や平坦面の傾きなどから、これら一連の造作の蓋石的な役割を果たしていたと考えることもできよう。また、土坑の上端はラッパ状に開いている。

**土坑2の状況 (第8図)** 土坑2は土坑1の北1mに位置し、平面が長径約80cm×短径約60cmの楕円形を呈する。しかし断面形は挿鉢状で、検出面から8cm程度で底面に到達した。削平を考慮しても土坑1に比べて明らかに浅い。ここから検出された土器は2点で、ともに壺(第16図44・45)である。

ここで検出された2点の土器も底面直上ではなく、黄褐色粘質土が充填された後に土器は約20cm離れて、ほぼ同一レベルで埋納されていた。土器と土坑の検出面レベルが同じため、土器は一部破壊された状態であり、さらに上に土器があったかどうかは不明である。また、土器にはそれぞれ隣接して同じレベルから石が検出されている。土坑1で確認されたような意図的な石組ではないものの、土器と石は有意な関係にあったことがここでも窺われる。

なお、第11トレンチで検出された土坑は、造出上の位置で見ると東寄りにあたるが、造出上で

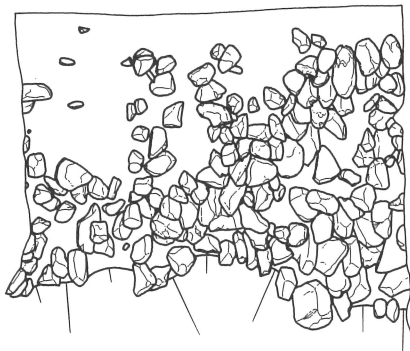
ような状態であり、有意な関係にあると考えられる。

なお、土器5は、土器6の直上に位置し、両者は明らかに上下の位置関係にある。土器6が埋戻され、その上端部が隠れた段階でなければ、土器5が置けない状況だったことがわかる。

(第5段階) 第1面土器の埋納。4点の土器が確認され、唯一の高杯が含まれている。高杯は横倒しで、やや低い位置から検出されたが、ほぼ平面的に埋納されていたと考えられる。第1面の土器群の接地面は土器5の上端レベルとほぼ同じであり、第2・3面の関係と同様、上下の位置関係にある。土器5と土器6の関係と同様、土器5を埋戻した後、その直上に土器1～4が埋納されたと考えられる。



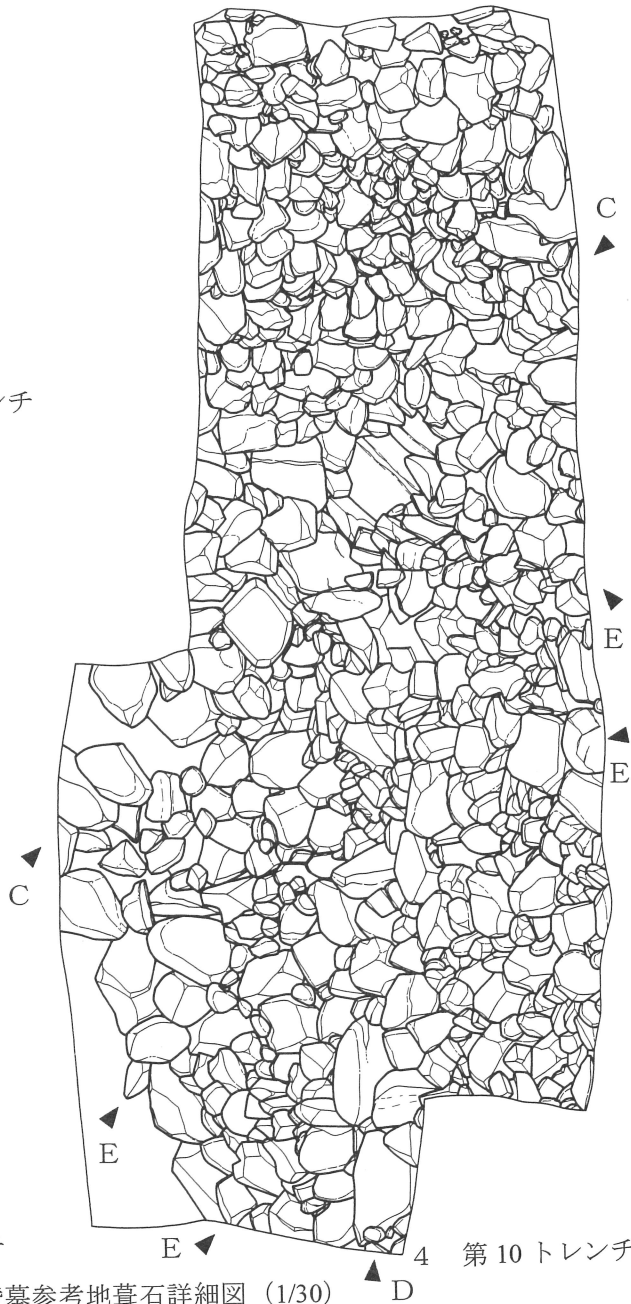
1 第1トレンチ



2 第2トレンチ



3 第9トレンチ



4 第10トレンチ

第9図 磐園陵墓参考地葺石詳細図 (1/30)

同種の遺構が他にもあるのかどうかという点については、現状では不明である。

以上、調査所見をもとに、復元的に記述してきたが、特筆すべきことは土坑1の土器の埋納状況にある。土器7点は極めて限られた空間内から検出されているが、一度の埋納では説明できない状況である。これは少なくとも3回に分けて土器が埋納されたことを示しており、単に土坑内に土器を納めるだけではなく、納める手順や行為それ自体に意味があったことを示唆している。

このミニチュア土器の用途を推定するため、内部の土壌採取が可能な、土器5・6・7について、自然科学的分析として花粉・寄生虫分析・植物珪酸体分析・土壌理化学分析・脂質分析を行った。土壌理化学分析による元素の含有量測定の結果、各土器内では、土坑1に隣接して採取した地山よりも、どの土器とも各元素の含有量が多く、何らかの供物が納められていた可能性が考えられた。さらに脂質分析による脂肪酸組成・ステロール組成の検討では、供物があった場合、動物質・植物質の両方を含み、動物質供物の中には、魚が含まれていた可能性を示すという結果が出た。

また、植物珪酸体分析では土器5内からイネ属のものが1個体検出された。これは、供物と考えるより、周辺植生に由来する可能性があるという。

なお、このような、ミニチュア土器を墳丘上で用いる例を馬見古墳群内に求めると、隣接する金比羅山古墳や乙女山古墳墳丘上の埴輪内に納められていた例があるが、その中では本例がもっとも古い例になると考えられる。

## (2) 葦石について

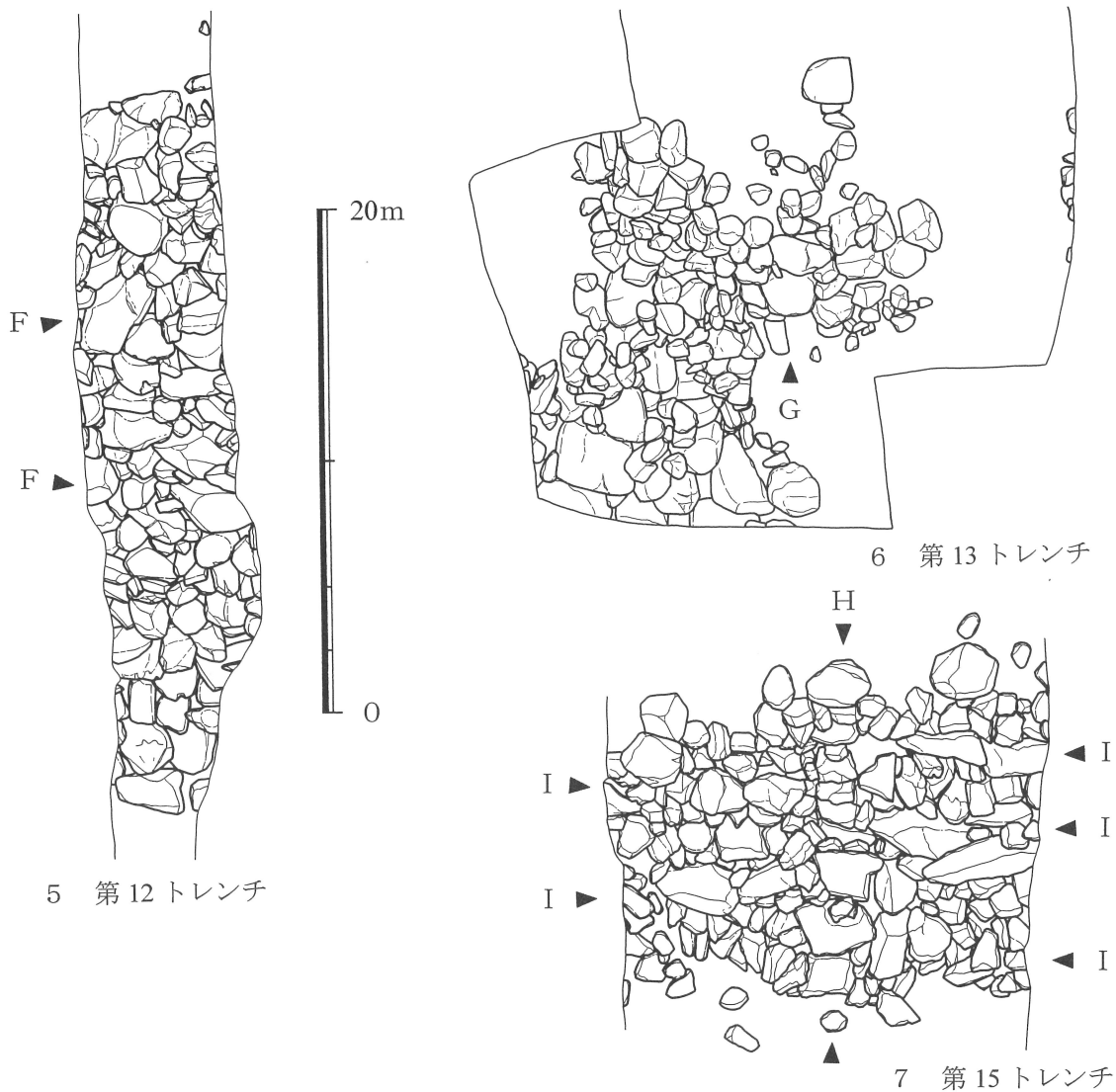
葦石は、すべて墳丘第1段斜面のものを検出した。葦き方や裾が、判明あるいは推定できるものとして、第1・2・9・10・12・13・15トレンチのものが挙げられよう。その中で基底石が確認されたのは第10・12・13トレンチで、残りは基底石が失われていた。以下、各トレンチの葦石についてまとめておきたい。

第1トレンチ(第9図1)後円部斜面にあたる。墳丘裾の崩落で石どうしの位置関係はやや疎らになっている。検出範囲内には、作業単位を区画すると思われる人頭大の礫を用いた縦目地が2本(A・B)確認でき、その間を拳大の礫で埋めている。礫の間が疎らなため不明瞭ではあるが、礫を横に一つずつ順次上に積んでいったと考えられる。

第2トレンチ(第9図2)後円部斜面にあたる。崩落・攪乱の影響で失われている部分も多い。拳大の礫のみが確認され、目地の存在は認められない。礫は長楕円形に近く、長軸を墳丘に向けて差し込むように、かつ非常に密に積んでいる。

第9トレンチ(第9図3)後円部斜面にあたる。大規模な墳丘改変により、その大半は失われているが、辛うじて後円部裾付近が遺存していた。石材は人頭大あるいはそれ以上の大きさのものが使われている。残存する箇所の高さは約62.7mで、ほぼ裾にあたる箇所と考えてよい。

第10トレンチ(第9図4)前方部斜面が造出へとつながる屈曲部にあたる。良好な状態で葦石を検出した。屈曲部には縦目地(C)が明瞭に確認され、前方部・造出両斜面の葦石の間に深く沈み込むような状況にある。このことから少なくとも検出範囲内では、他のすべての葦石に優先して設置されたことがわかる。前方部斜面の葦石は、特に目地となるものは観察されず、比較的雑然



第10図 磐園陵墓参考地葺石詳細図 (1/30)

とした状態にあり、一気に石が充填されているかのようである。一方、造出斜面の葺石を観察すると、まず大きく分けて、下位・上位ふたつの範囲に分けて礫が設置されていることがわかる。下位の範囲を葺き終えたところで、人頭大の礫を1列に並べた(D)ようである。当然下位が先に設置されるが、下位の中での設置順序を観察すると、屈曲部の目地から造出前面に向かっていくことがわかる。目地Cの周辺は人頭大の礫を集中的に用いている。下位の範囲を葺き終えて、上位の設置に移行するが、上位の設置順序も同様である。

なお、設置順序をさらに詳細に観察すると、基本的に人頭大の礫2～4石を列状に並べ(E)、そこを起点に拳大の礫を数十cm程度の範囲に充填しており、それが作業の単位になっているようである。そして、1単位の施工が終了したところで、その単位に接するように、また人頭大の礫を列状に並べるといった作業を繰り返している。その際、人頭大の礫は、縦・横・斜めと一定しないものの、列を成しているため、結果的に目地のように観察される。

第12トレンチ(第10図5)前方部南側面の斜面にあたる。裾を検出したが、裾付近には、人頭大の平石を多用している。基本的には、横方向の列として、積みの単位が確認できるが、2箇所傾斜角が変化しており(F)、作業単位を表している可能性がある。全体に人頭大の礫で占められ、

拳大の礫はあまり使用されていない。

第13トレンチ（第10図6）前方部南側面の斜面にあたる。トレンチ南壁沿いに裾を検出した。第12トレンチと同様、人頭大の平石を多用している状況が観察される。わずかな範囲が遺存するほかは大規模に破壊されているが、基本的には、横方向の列として、積みの単位が、かなり明瞭に観察される。また、目地Gを境にした両側の範囲では使用石材の大きさが異なるので、これが作業単位の境を示していると考えられる。トレンチ上半部では、一部に残る以外は流失しており、細かい状況を明らかにすることはできない。

なお、裾を検出した第10・12・13トレンチでは、そのレベルがいずれも62.5m前後で一定しており、おおむね墳丘南側面の墳丘基底レベルを表すと考えられる。

第15トレンチ（第10図7）前方部正面の斜面にあたる。裾は失われているが、残存部の最低のレベルが標高63.1mであることから、裾に比較的近い位置と判断できる。トレンチ中央に見かけの縦目地(H)が認められるが、先に設定したものではなく、観察の結果4回に分けて段階的に設定されたものと考えられる。しかし、この見かけの目地を挟んで左右の積みの単位は異なるので、結果的には作業単位を区画する目地にはなっている。左右それぞれの範囲内における積みの単位は、横方向において極めて明瞭である。左右とも人頭大の礫を1列横方向に積み(I)、その上に拳大の礫を1～3列横方向に積んでいる。それを1単位として、同様の作業を繰り返しているように観察される。視覚的な側面を考慮してのことかどうかは不明であるが、極めて整然としている。第10トレンチにおいても、人頭大の礫と拳大の礫がひとつの単位として繰り返されていることが確認されているが、第15トレンチでは、それが極めて整然とした形で見ることができる。

以上、葺石について簡単に述べてきた。葺石の残らないトレンチも多く、実態を明らかにするには情報が不足しているが、第1・2トレンチでは拳大の礫が中心であり、第9トレンチ以降人頭大の礫の使用が顕著になることとは対照的である。巨大な墳丘だけに、各所で葺石の様相が異なっていた可能性が十分に考えられよう。

なお、葺石の石材に関しては、後掲の奥田 尚氏の報告を参照されたい。

### (3) 墳丘規模について

葺石で裾が確認されたものとして、第10・12・13トレンチがある。また、第1・9・15トレンチでも裾は失われていたものの、本来の裾とのレベル差はごく少ないことから、極めて裾に近い位置と考えることができよう。これらの所見をもとに、墳丘裾のレベルが1周同じであることを前提にして、裾が失われた第1・9・15トレンチの葺石傾斜角から推定した裾の位置、および平成8年の調査結果も併せて導き出した復元案が第1図である。この復元から導き出した数値によると、全長約220m、後円部径約130m、前方部長約90m、前方部最大幅約110mとなる。くびれ部と造出間の距離は約15mである。

また、周濠の北側については具体的な数値は示せないが、特に前方部北隅対岸部の住宅地は道路から一段低くなっており、本来の濠は現在より約10m程度は広がったと考えられる。

造出については、その正確な規模、形状は明らかにし得ないが、第9～13トレンチの葺石の状況から復元した墳形から想定する限り、平面台形を呈し、幅は、基部で約30m前後、裾からの奥

行き約15m程度と考えられる。高さは、葺石基底面から土坑検出面までで約2mであるが、それより上面がどの程度削平されていたのかは不明である。しかし、土坑1の石組みや土器の埋納は土坑上面から人間の手の届く範囲の作業と考えられ、現状の造出上面である標高64.8mとそれほど違わないと考えられる。

#### 4 出土遺物（第11～18図）

今回の調査では出土・表採を合わせた遺物の総数は5101点にのぼる。既に述べてきたように、埴輪が全体の7割、瓦質土器が2割弱で、両者でほぼすべてを占めると言っても過言ではない。しかしその大半は細片であり、全体の状況のわかるものは少ない。以下、本陵墓参考地の埴輪の構成のわかるもの、墳丘利用の遍歴を示すものを中心にその概要を述べたい。

##### （1）埴輪（第11～15図）

埴輪は、円筒埴輪のほか、形象埴輪の種類がかなり豊富であることが明らかとなった。その大半はそれらが樹立されていたと考えられる、くびれ部や造出付近に設定したトレンチからの出土である。そのほか、第6トレンチから、原位置にはないが、ほぼ全形を知り得る鱗付円筒埴輪が出土していることが注目される。これらの埴輪は、すべて黒斑をもつ野焼きの製品である。

なお、挿図番号横の括弧内の数字が出土トレンチを示す。

1～7は円筒埴輪の破片である。破片数が多いが、鱗付円筒埴輪ほど全体の特徴のわかる資料はなく、口縁や突帯に特徴をもつ破片を例示しておきたい。1・2は端部が強く屈曲するもので、特に1は摩滅しているものの、非常に器壁が薄く屈曲部も長い点に特徴がある。3は粘土帯の貼付口縁となっている。4は円形透孔をもつ胴部破片である。5～7は突帯の断面形を示した。5のように厚い器壁に幅広の突帯がつくものや、6・7のように器壁が比較的薄く、突帯が突出するものがかなり認められる。

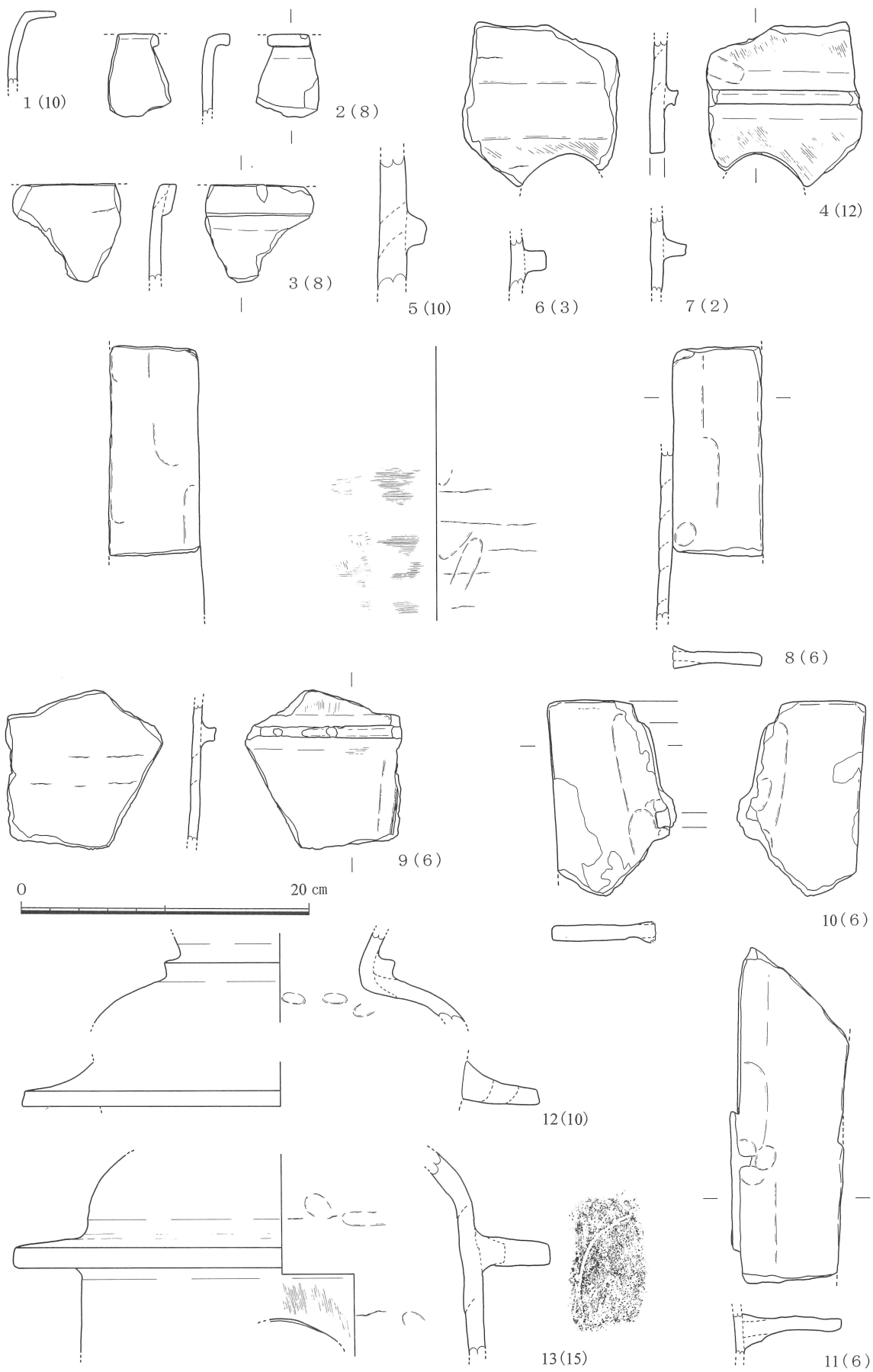
8～11と14～17は第6トレンチのIII d層内に投棄されたような状態で出土した鱗付円筒埴輪である。もっとも残りの良い14について述べておきたい。

4条5段構成で、現状の器高は約79cm、復元高は約100cmに及ぶと思われる。ほぼ垂直に立ち上がる端正な円筒形をなし、口縁端部は強く屈曲する。第1段に半円形と考えられる透孔、第3・4段には長方形透孔が穿たれている。黒斑が比較的広い範囲に明瞭に認められる。

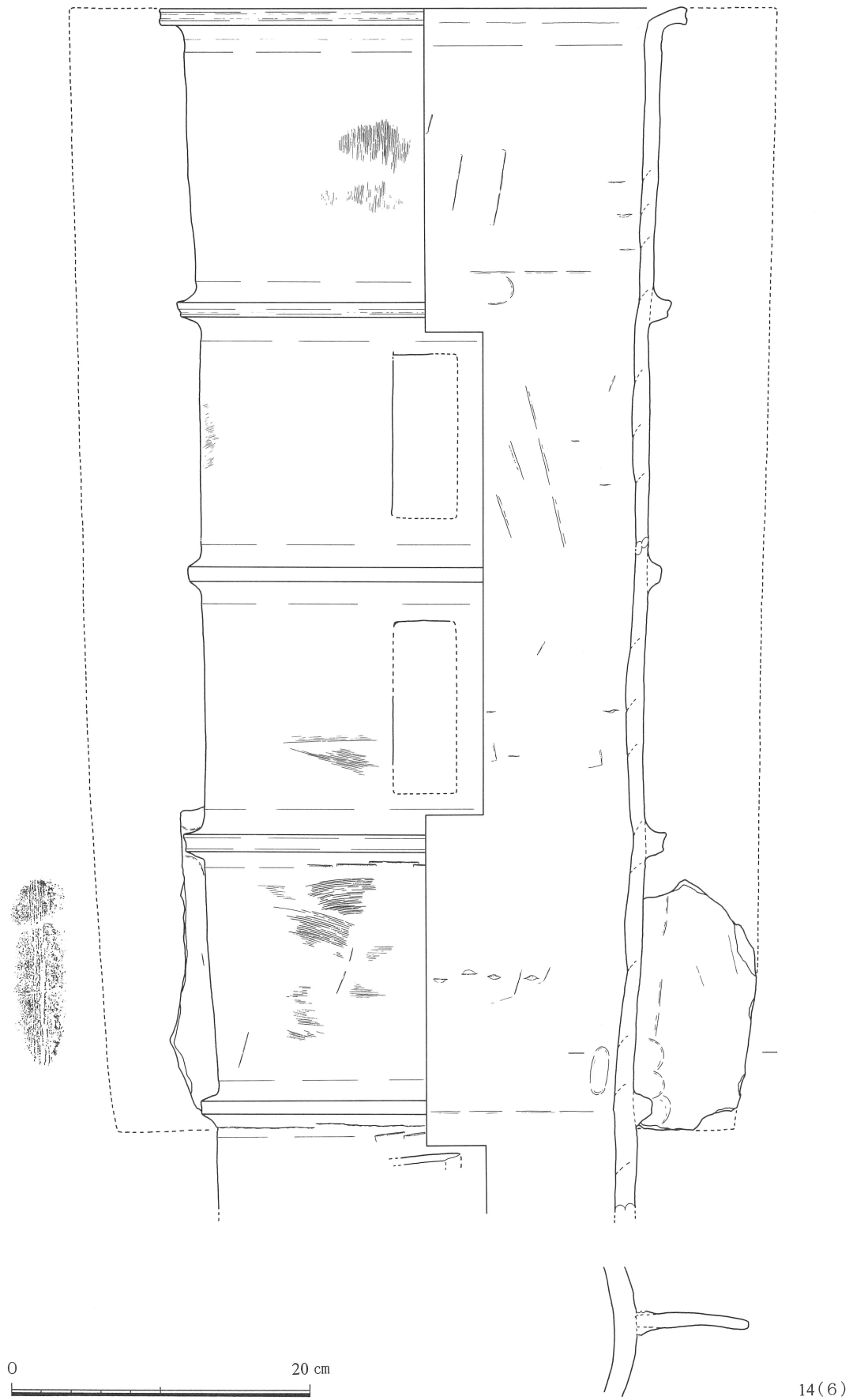
調整は、表面の摩滅のため不明瞭な部分も多いが、外面は基本的に条線の非常に密なハケ調整である。突帯接合後のタテハケが非常に明瞭に観察される。内面は条線がほとんど見られず、板ナデ調整と判断され、一部に指ナデ調整が認められる。

第1段の突帯から上には幅約7.5cmの鱗が接合する。鱗の接合面に当たる箇所は、口縁屈曲部・突帯を切り取り、突帯間の器壁には2～4条の線刻を入れている。

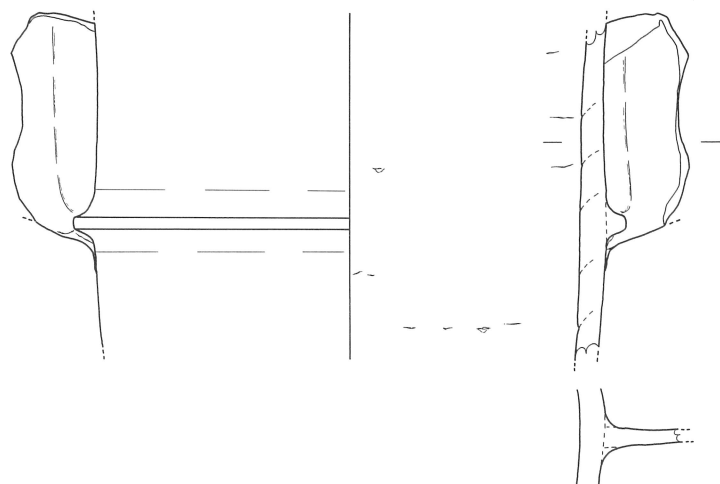
ある程度形態のわかる8・15・16においても、微細な調整や形態については、各個体で異なる部分もあるが、基本的には14と同様のものとして理解できよう。17は16と同一個体と思われ、突帯接合に関連しそうな横方向の工具痕が認められる。9は薄手の器壁に特徴があり鱗の接合箇所も確認できる。10・11は鱗の破片である。10は口縁部付近の破片で、屈曲する口縁端部の形態が



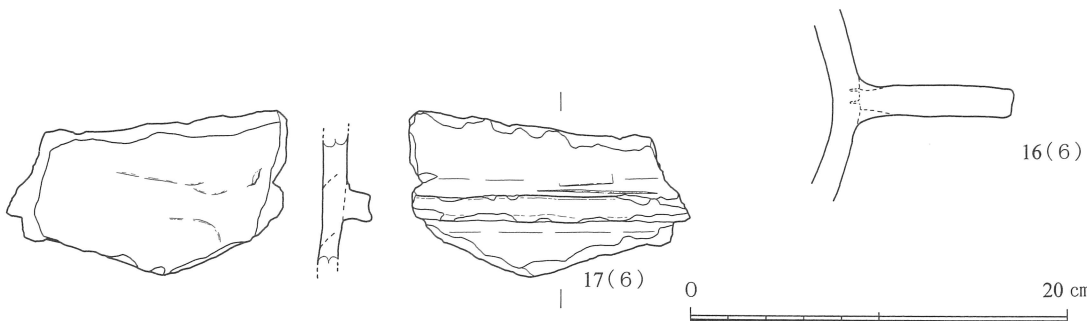
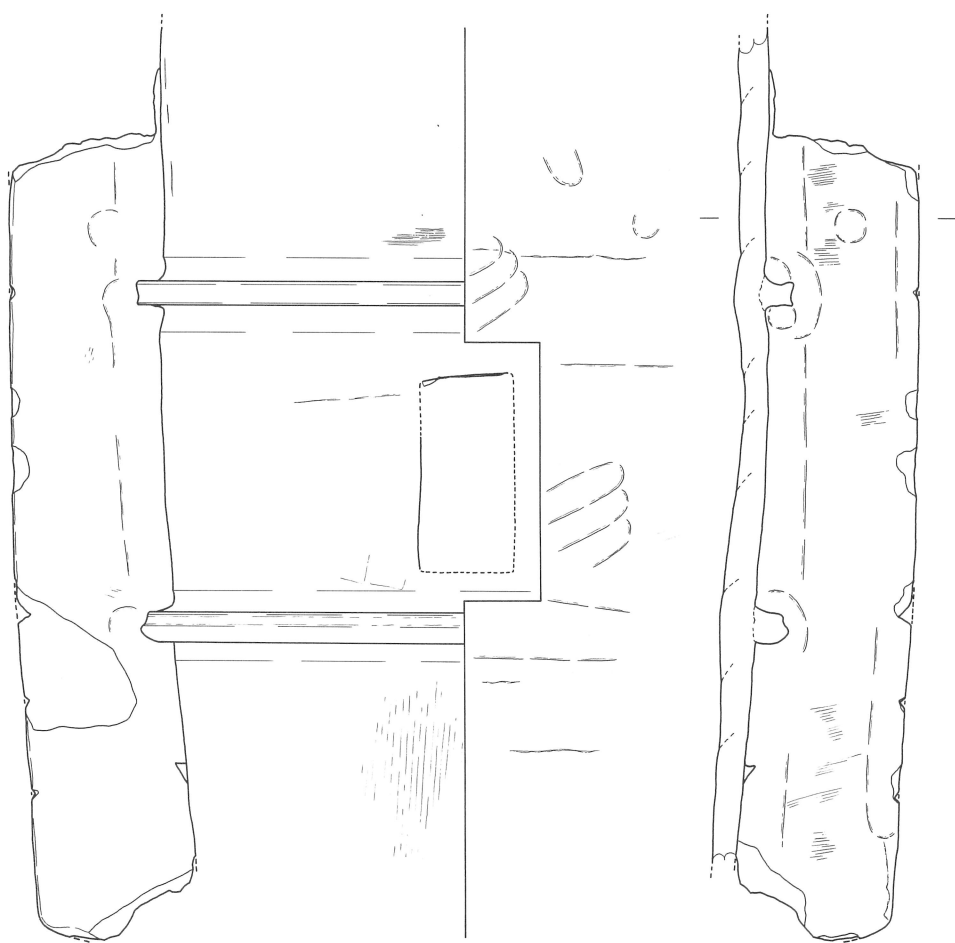
第 11 図 磐園陵墓参考地出土品実測図(1) 円筒埴輪・鱗付円筒埴輪・壺形埴輪 (1/4)



第 12 図 磐園陵墓参考地出土品実測図(2) 鱗付円筒埴輪 (1/4)



15(10)

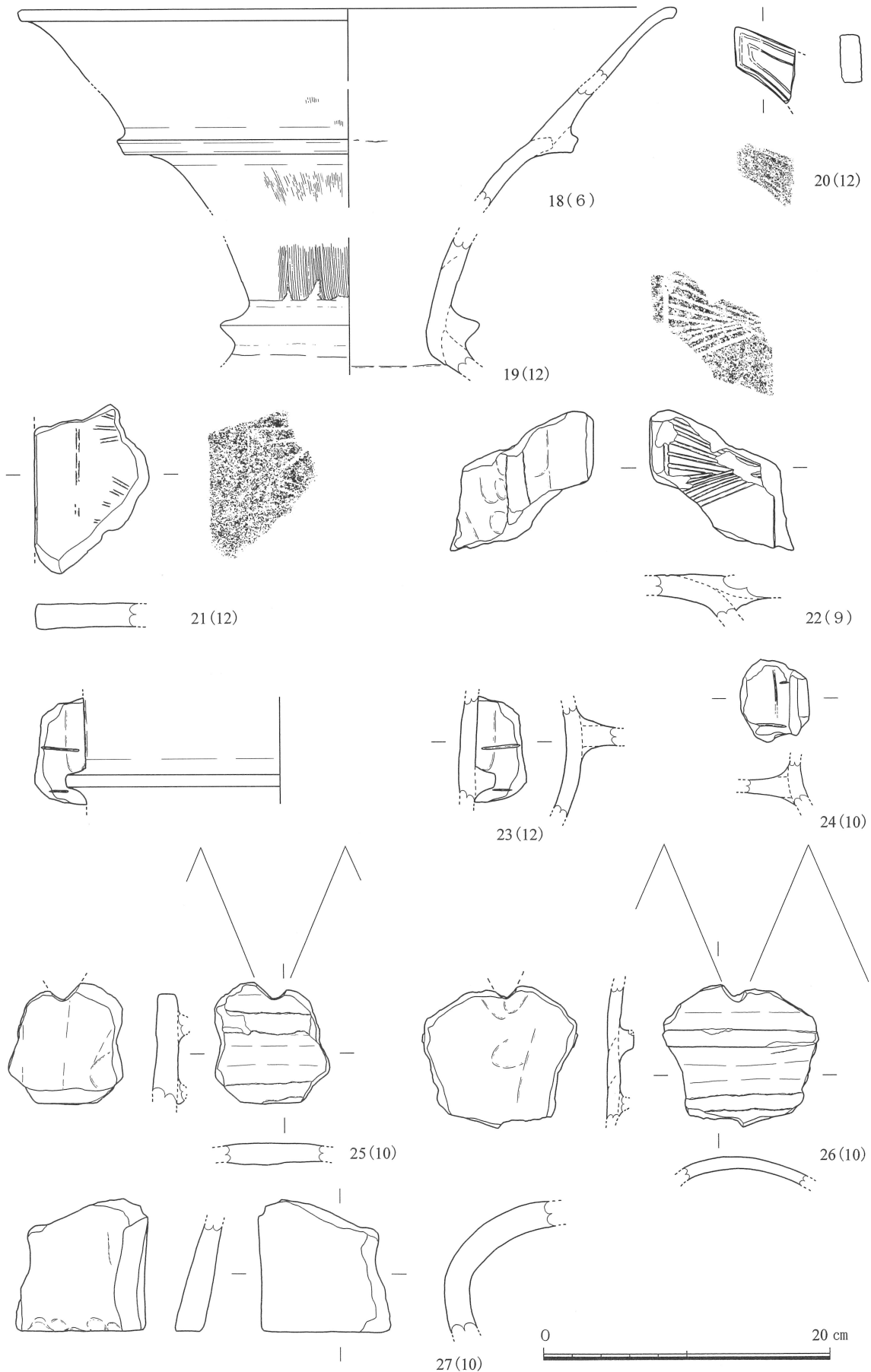


16(6)

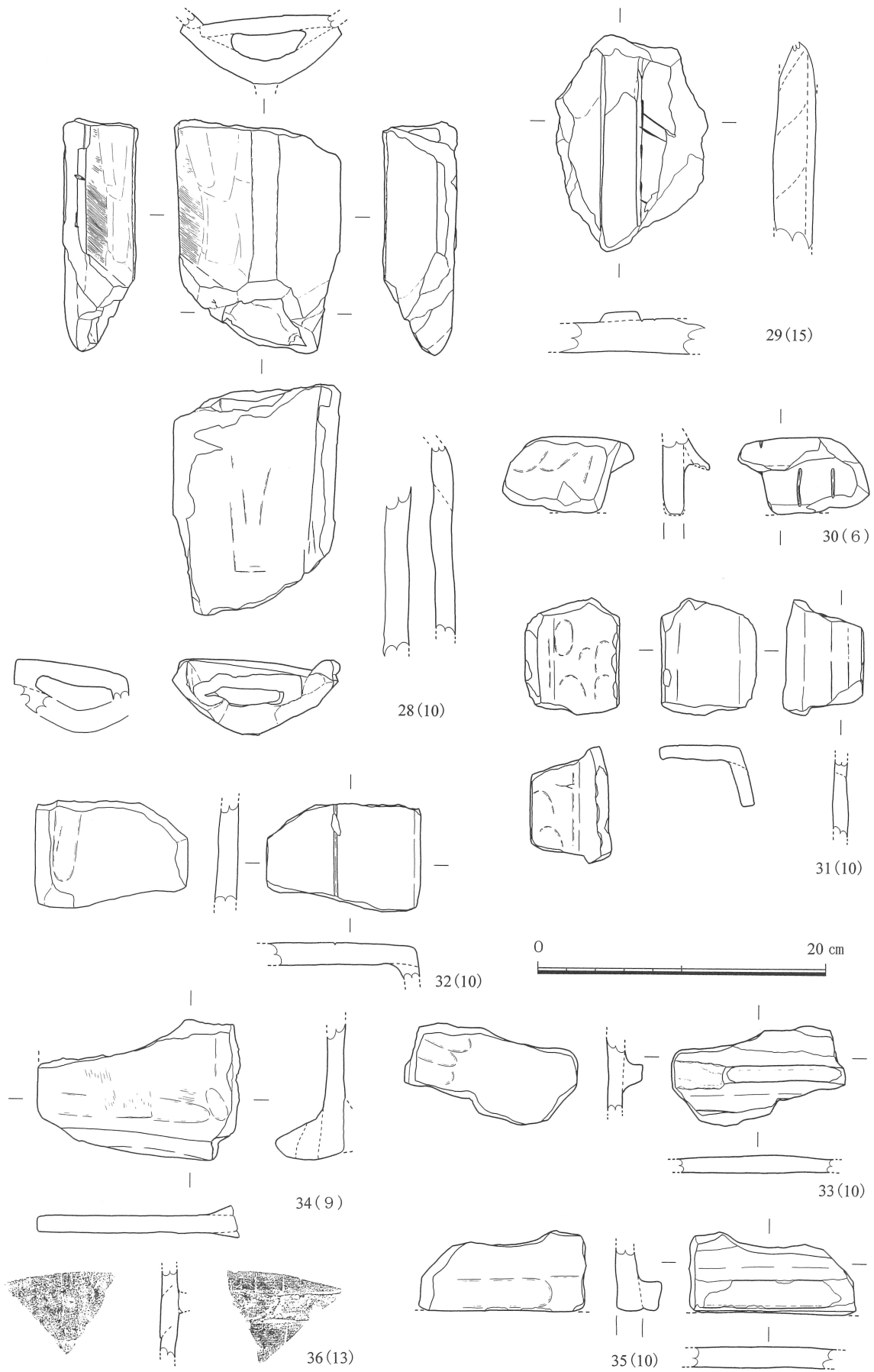
17(6)

0 20 cm

第13図 磐園陵墓参考地出土品実測図(3) 轆付円筒埴輪・形象埴輪 (1/4)



第 14 图 磐園陵墓参考地出土品実測図(4) 形象埴輪 (1/4)



第 15 图 磐園陵墓参考地出土品実測図(5) 形象埴輪 (1/4)

わかる。11は9と器壁断面の特徴が一致しており、同一個体の可能性が考えられる。

12・13は壺形埴輪である。両者は全体の形態のほか、鏝の断面形態や製作技法も異なる。内面には指ナデ調整が認められるが、外面は摩滅のため不明である。18・19は朝顔形埴輪の口縁部と頸部で、両者は別個体である。外面にはタテハケが認められる。ほかに第12トレンチでも比較的大きな破片が出土しているが、これらを含めても、全体に破片は少ない。

20は蓋形埴輪の立飾り、もしくは靱形埴輪の外縁につく鱗状突起の先端部と考えられる。摩滅で不明瞭ながら線刻が認められる。21・22は盾形埴輪である。ともに盾面の破片で内側を線刻で充填した鋸歯文が施文されている。23・24もここでは盾形埴輪としておくが、鱗部に線刻をもつ鱗付円筒埴輪の可能性もある。25～27は柵形埴輪である。25・26とも大きく欠損しているが、近接した2条の突帯と鋸歯状切り込みの基部が確認できる。27は柵形埴輪の底部と考えられる。

28～32は家形埴輪である。28は屋根の頂部、29は妻にあたる壁、30は平にあたる壁と軒先部分に相当すると考えられる。31・32はともに壁の隅角にあたり、31の両端部は窓枠に相当し、32には柱の表現が線刻によって施されている。

33は、湾曲せず板状の器壁であることから、囿形埴輪の可能性が高い。同様の特徴をもつ破片は、ほかにも散見される。

34は板状の器壁をもち、一見盾のようにも思われるが、下端に突帯があり器種が特定できない。35も板状の器壁に比較的高い突帯がつき、突帯直下が透孔状になることから、囿形埴輪の入口部分かとも考えられるが、断定するには至らない。

36は須恵質の埴輪である。もとより本陵墓参考地に本来伴うものではない。突帯は剝離している。外面はタテハケ調整、内面は板ナデ状の痕跡が認められる。

## (2) ミニチュア土器

土坑1から7点(第16図37～43)、土坑2から2点(第16図44・45)のミニチュア土器が出土した。いずれも土師器である。各個体とも土圧や粘土の付着等の影響で、出土時からかなりもろい状態にあった。特に端部を中心に傷みがひどい。

37は屈曲して長く伸びる口縁部とやや角張った体部に特徴がある。外面調整は摩滅で不明である。内面は横方向の削り痕が認められる。38はもっとも小ぶりの個体で、口縁部は欠損する。内外面の調整はナデ以外特に認められず、手づくねによる製作である。39・41・42は微細な違いはあるが、おおむね特徴は一致する。内外面ともナデ調整だが、特に39・41は内面に手づくねの際の指頭押圧痕が顕著に残っている。40は高杯で、杯部は摩滅のため調整不明である。脚部は外面がナデ調整で、内面がナデのほか、絞り痕のようなものが認められる。43は直立する口縁部に特徴があり、他の壺とは形態が少し異なる。また、調整も内面に削り痕、外面にはわずかながらハケメも認められる。44は比較的平らな底と、直線的にたち上がる体部が特徴的である。口縁部は欠損する。内面の指頭押圧痕が顕著である。45は小破片だが44がやや丸味をおびたような形態と思われる。摩滅のため、調整痕はほとんど認められない。

色調は、38と40が黄灰色を呈する以外は赤褐色を基調とする。また、40の高杯は壺に比べ、やや精良な胎土を用いているように観察される。

なお、46・47は土坑2周辺を精査中に検出したものである。造出上面は、ほぼ水平に削平されており、土坑2も検出面に土器が露出する状況にあったことから、削平時に土坑2内の土器が、外側に引きずられたものと考えられる。よって、本来土坑2には44・45・46・47の最低4個体は埋納されていた可能性が考えられよう。(清喜裕二)

### (3) 中・近世の遺物

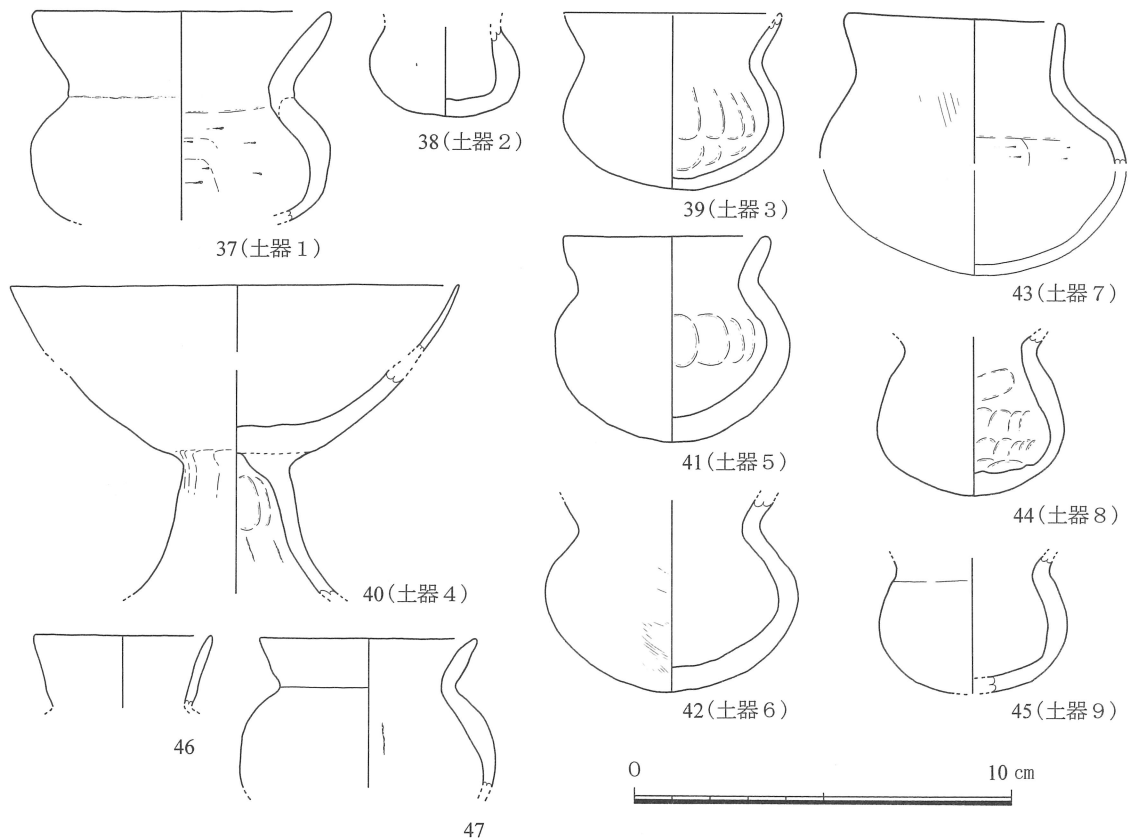
本陵墓参考地において出土した古墳時代以外に属する遺物をまとめておく(第17図)。54以外は第10トレンチから出土したものであり、主に本陵墓参考地が中世末期に城砦として利用されたことに伴う遺物である。

これらの遺物のうち第17図48・49は土師質土釜である。1、2とも口径22cm程度に復元できる。器厚は2mmほどと薄く、白色味の強い淡黄褐色を呈する。下ぶくれとなる球形の胴部中央に幅1cmほどの鏝がめぐり、鏝から下の部分には煤の付着が観察できる。また、「く」の字状に強く外反する口縁端部は内側上方につまみ上げるようにナデ調整が施されている。

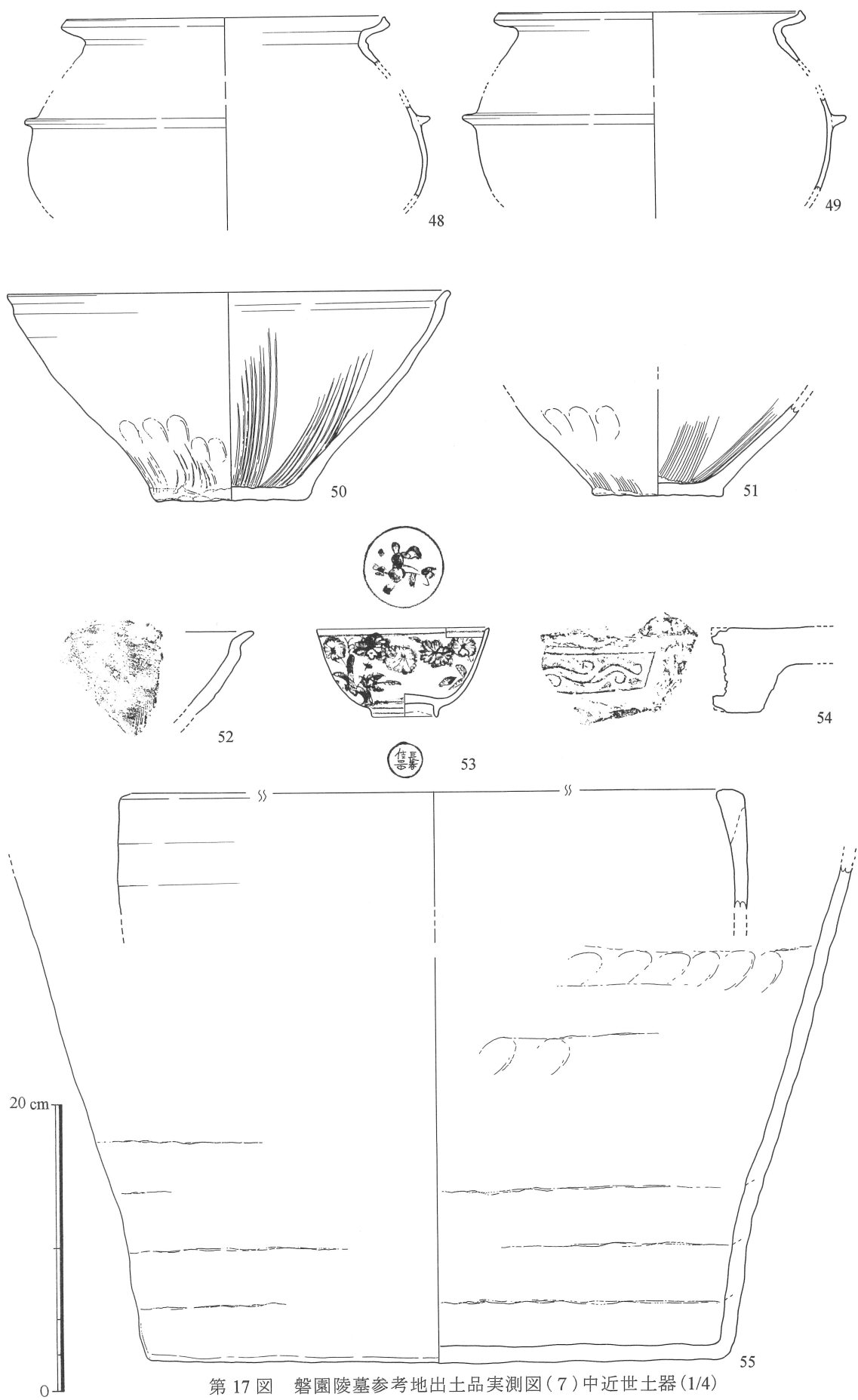
この種の土釜は、菅原正明氏によって大和型I2型に分類されているものであり、産地は大和西ノ京付近に求められる。さらにこの型式分類から得られる編年観では、川口宏海氏によってIII-1期に分類され、16世紀半ばから後半の製作年代が与えられている。

本陵墓参考地からはこのほかにも多くの土釜の破片が出土しているが、いずれもこの型式に属するものと判断できる。

続いて50・51は瓦質の播鉢である。50についてはほぼ全形を知ることができ、口径(復元)30.9



第16図 磐園陵墓参考地出土品実測図(6) ミニチュア土器(1/2)



第 17 图 磐園陵墓参考地出土品実測図(7)中近世土器(1/4)

cm、器高14.5cm、底径10.5cmを測る(図版7-6)。全体のプロポーションではやや内彎気味の体部を呈し、口縁端部は強い横ナデ調整を施すことによって、先端がやや尖り気味になり、内面に面を持たせるものである。おろし目は7条が下方から上方に向かって施され、櫛状工具の原体幅は2.5cm程になり、条痕の本数は10本を数える。外面の下半には櫛状工具による調整の後ナデ調整が施され、また指頭圧痕もわずかに観察される。その他の部位はすべて横ナデ調整が施されている。

51も底部付近しか残存していないが、50と同様の形状を示す。これら2個体ともおろし目はそれほど摩耗しておらず、長期にわたって使用されたとは考えられない状況にある。

これらの播鉢の型式編年観は近江俊秀氏によって提示されており、氏の編年によると5期に位置付けられ、実年代観では先の土釜と同じく16世紀後半に求められる。

52も瓦質の播鉢であるが、口縁端部に強い横ナデ調整が施されることによって、S字状を呈している。近江氏の編年観では7期に位置付けられ、50・51よりは後出する型式であり、実年代観は17世紀前半が与えられている。

53は中国景德鎮系の青花(染付)の磁器碗である(図版7-5)。その特徴を示すように底部中央が上げ底状に盛り上がり、いわゆる饅頭心と呼ばれる形状を示している。口径12cm、器高6.2cm、高台径4.6cmを測る。現在破片を接合することによって完形に復元できるが、割れ面に漆による接合痕を残し、2片に割れたものを接着して使用していたことを窺うことができる。高台の裏面には「長春佳器」の銘が記されている。類品は大阪城跡から出土し、所属時期は大阪城石山本願寺期の後半に位置付けられ、実年代観は1580年以前と考えられている。

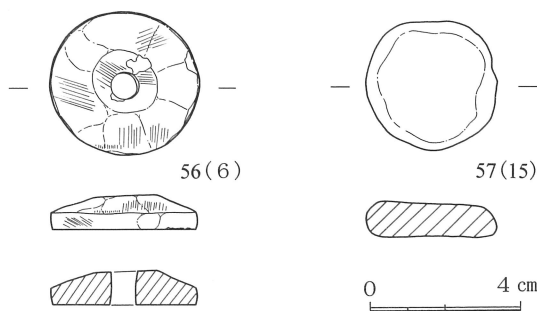
54は軒先瓦片であり、やや退化した唐草文様が描かれている。瓦はわずかししか出土していないことから、墳丘上に瓦葺きの建物が存在していた可能性は低い。しかしながら、本個体は第8トレンチの地山直上から出土しており、本瓦の所属時期も中世末期に位置付けられる可能性もあろう。

55は底径42.0cm、現存高約36cmを測る瓦質の大甕である。第10トレンチに据え付けられた状態で出土した。また、第15トレンチからも同様の瓦質大甕片が出土している。図に示したように直接の接合関係が不明のため器高は不明であるが、口縁部の形状は真っ直ぐ立ち上がり、口唇部をやや肥厚させる形状を示すものと考えている。この個体の所属時期についても、瓦質播鉢と同様16世紀後半に求められよう。

この瓦質大甕については土器内の土壌分析と土器の内面にあった付着物の脂肪酸分析を実施した。その結果動物の糞尿に特有の脂肪酸が検出されたことから、肥壺に使用されていた可能性が最も高いと判断された(分析は株式会社パリノサーベイに依頼した)。

その他にも図化できない小片であるが、肥前系陶器や瀬戸・美濃系の天目茶碗片などが出土している。輸入陶磁器についても龍泉窯系の青磁碗片等も存在している。これらの遺物の示す時期は概ね16世紀後半に集中しているといっても過言ではない。

すなわち本陵墓参考地が城砦として利用された時期はほぼこの16世紀後半に推定できるのではなかろうか。このころの大和盆地における戦国大名の動きと関連させると、松永久秀の大和侵入



第18図 磐園陵墓参考地出土品実測図(8)

紡錘車形石製品・円板形土製品 (1/2)

(1559～1577)に伴う軍事的な緊張状況が、本陵墓参考地を城砦として利用する大きな経緯になった可能性が高い。

一方下限を示す遺物として17世紀前半の資料がわずかに存在していることから、近世幕藩体制の確立と共に、本陵墓参考地の城砦としての利用が終了したと考えられる。このように考え

ると、本陵墓参考地が城砦として利用された期間は長く見積もっても50年程度ということになる。但し、この城砦の築造主体を明らかにするような史料は、確認できていない。(徳田誠志)

#### (4) その他(第18図)

埴輪・中世遺物の他に、比較的上層から各時代の遺物が混在する状況で出土している。近世の磁器も含まれるが、全体量が極めて少ないうえ、大半は細片である。ここでは古墳時代の所産と考えられるものの、本陵墓参考地の築造に伴うか否かが不明瞭な遺物を紹介するにとどめたい。

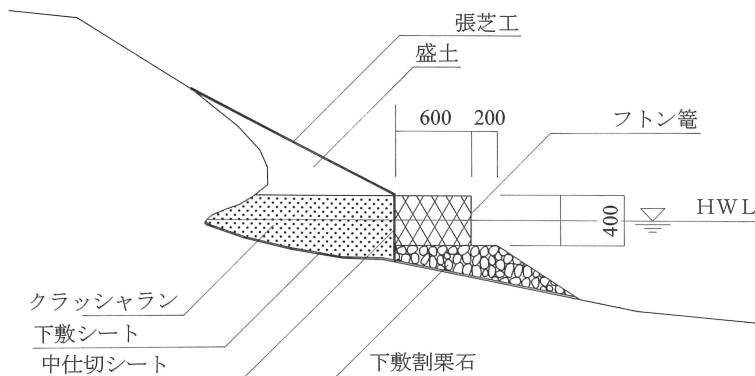
56の紡錘車形石製品は淡緑灰色の滑石製で偏平な裁頭円錐形を呈する。比較的丁寧に研磨されており、削痕はほとんど認められず、擦痕も少ない。57の円板形土製品は第15トレンチIII C層から出土した。摩滅が著しく調整等は不明である。

## 5 まとめ

以上、調査成果を記述してきたが、要点を列挙し、まとめとしたい。

- 1 葦石基底部の残存により、墳丘裾が確認された箇所があった。これにより、本来の墳丘規模がある程度推定できた。全長は約220mに復元できる。
- 2 前方部南側面に造出の存在が確認された。くびれ部からは多少離れた場所に設定されている。その上面では、ミニチュア土器を納めた土坑2基が検出され、造出上で祭祀を行っていたことが判明した。さらにミニチュア土器内の土を分析した結果、動物質遺体や植物質遺体の存在の可能性が指摘された。祭祀の内容を考えるうえでは興味深い、積極的な評価をする段階ではないので、今後の類例の増加を待ちたい。
- 3 16世紀後半に、本陵墓参考地に対して大規模な改変が加わり、城砦として使用された可能性が高いことが判明した。これは17世紀前半には廃絶している可能性が高い。それにより、現在の墳丘の状況がおおよそ形成されたと考えられる。それ以前は、比較的築造時の遺構がよく保存されていたものと考えられる。
- 4 埴輪は細片が多いものの、円筒埴輪の他に形象埴輪の種類が豊富であることが判明した。特に、類例の少ない柵形埴輪の存在が確認されたことは注目される。これら形象埴輪は、主として造出周辺で出土している。また、鱗付円筒埴輪に比較的良好な資料が得られた。
- 5 本調査結果と工法検討会を踏まえて、陵墓管理委員会において整備工事の方法が検討された。その結果、墳丘裾の護岸工事は布団籠工法(第19図)によって現状を保存することとした。

これに使用する石材は、葺石と区別がつくように、奈良県五條市の大阿田産の結晶片岩を使用することとした。布団籠の設置にあたって、掘削は一切行わない。(清喜裕二)



第 19 図 磐園陵墓参考地墳塋裾護岸工事設計図 (1/60)

## 磐園陵墓参考地の葺石の石材

奥 田 尚

### はじめに

墳丘の裾部に設定されたトレンチに見られる葺石の石材を裸眼で観察した。観察した石材の石種・鉱物種とその岩相、石材の採取推定地について述べる。

#### 1 石材の石種と岩相

識別できた石種はアプライト、ペグマタイト、細粒黒雲母花崗岩、中粒黒雲母花崗岩、角閃石黒雲母石英閃緑岩、閃緑岩 A、閃緑岩 B、斑糲岩、流紋岩、安山岩、柘榴石黒雲母安山岩、輝石安山岩、火山礫凝灰岩、片麻状中粒黒雲母花崗岩、変輝緑岩である。また、鉱物種は石英である。これら石種・鉱物種の特徴について述べる。

**アプライト**：色は灰白色、淡茶色で、礫形が垂角である。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、淡茶色透明で、粒径が 2～4 mm、量が非常に多い。長石は灰白色、粒径が 2～4 mm、量が中である。

アプライトは奈良県北葛城郡當麻町の岩橋山や生駒郡平群町の生駒山地、天理市東方の山地に部分的に分布する。近距離では當麻町太田から同町竹内にかけての谷川の礫にみられる。

**ペグマタイト**：色は灰白色で、礫形が角、垂角である。白色の長石中に柱状の石英が顕著なペグマタイト構造を示すものや巨晶をなすものがある。石英と長石が噛み合っている。石英は灰色透明で、粒径が 2～30mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が 2～40mm、量が多い。

ペグマタイトは當麻町太田から竹内にかけての山麓の谷川の礫、桜井市車谷の巻向川の川原石、天理市の菩提山川の川原石等にみられる。礫形と岩相では採石地を特定できない。

**細粒黒雲母花崗岩**：色は灰色で、礫形が垂角である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が 0.5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が 1～3 mm、量が中である。



1 磐園陵墓参考地第11トレンチ土坑1 ミニチュア土器出土状況



2 磐園陵墓参考地第10トレンチ瓦質甕・磁器出土状況

図版 4



1 磐園陵墓参考地第1トレンチ全景



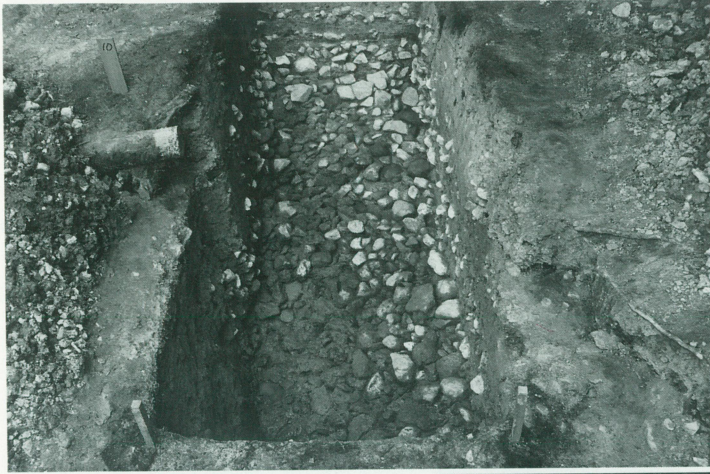
2 磐園陵墓参考地第6トレンチ土層断面



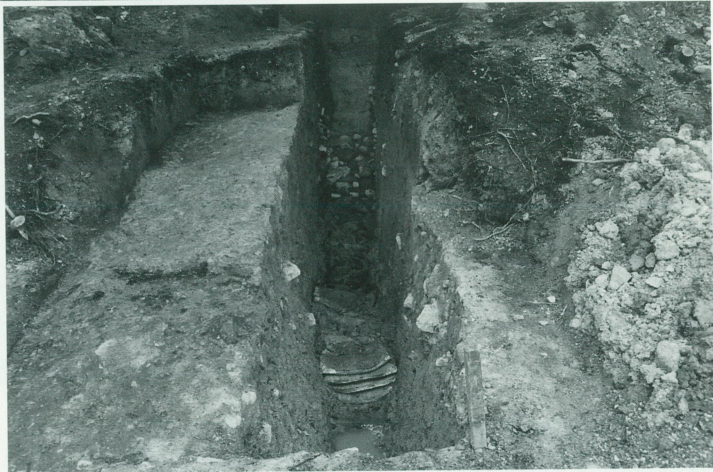
3 磐園陵墓参考地第9トレンチ  
拡張区葺石検出状況



4 磐園陵墓参考地第10トレンチ  
瓦質甕・磁器出土状況



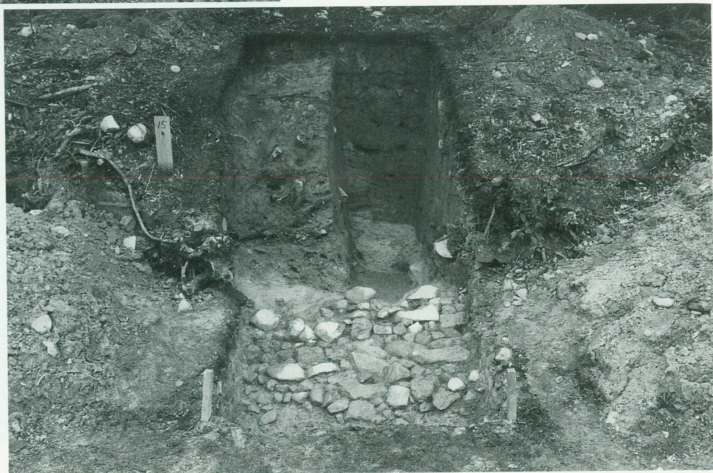
1 磐園陵墓参考地  
第10トレンチ葺石検出状況



2 磐園陵墓参考地  
第12トレンチ葺石検出状況

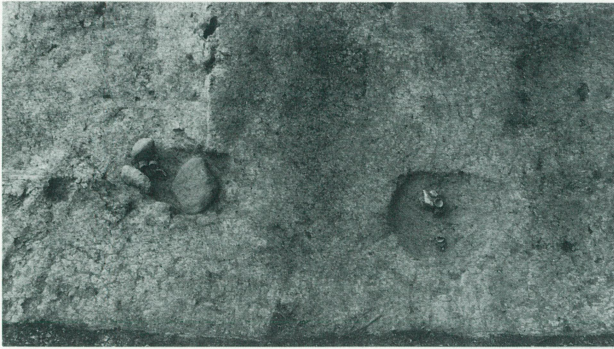


3 磐園陵墓参考地  
第13トレンチ葺石検出状況

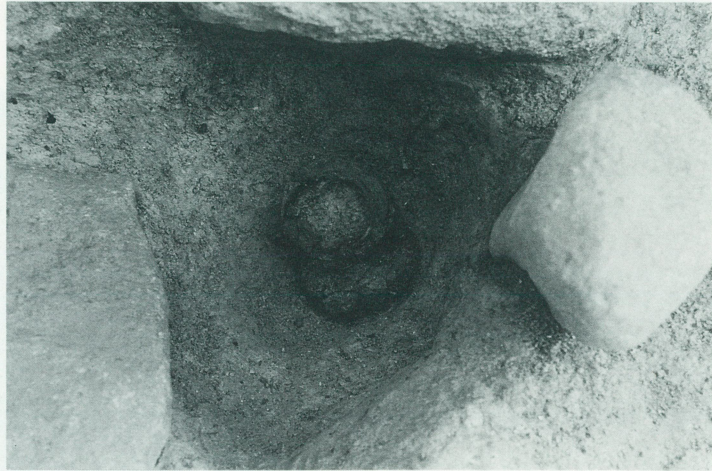


4 磐園陵墓参考地  
第15トレンチ葺石検出状況

図版 6



1 磐園陵墓参考地  
第11トレンチ土坑1・2検出状況



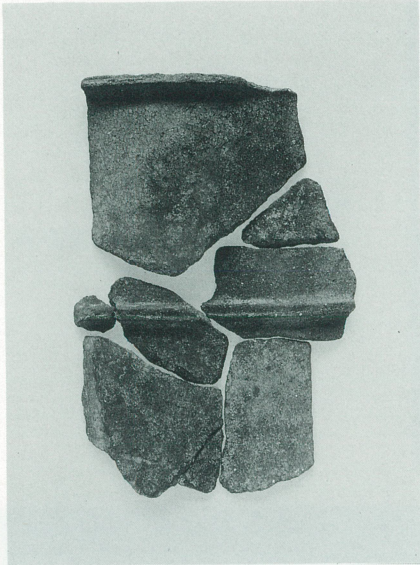
2 磐園陵墓参考地  
第11トレンチ土坑1  
土器6・7出土状況



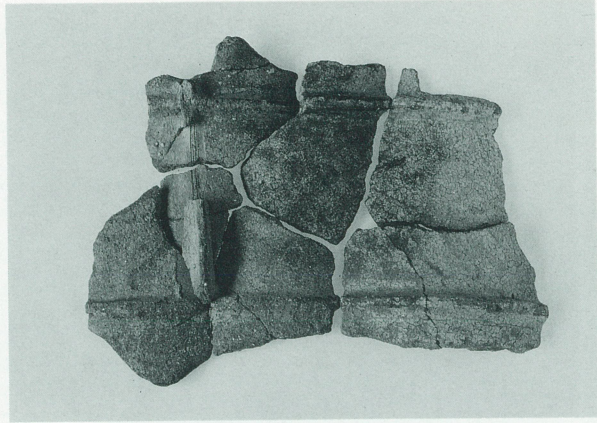
3 磐園陵墓参考地  
第11トレンチ土坑1  
土器5出土状況

4 磐園陵墓参考地  
第11トレンチ土坑1完掘状況

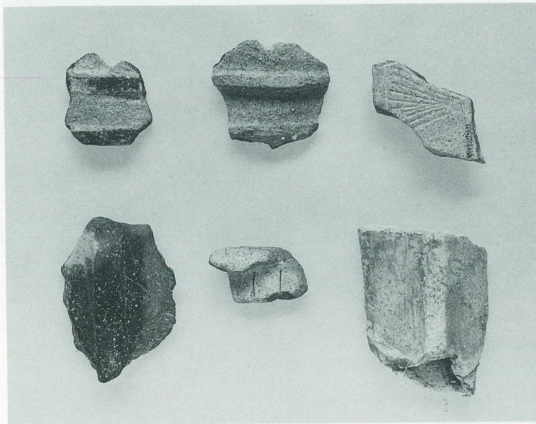




1 磐園陵墓参考地出土品  
鱗付円筒埴輪口縁部(第6トレンチ出土)



2 磐園陵墓参考地出土品  
鱗付円筒埴輪胴部(第6トレンチ出土)



3 磐園陵墓参考地出土品  
形象埴輪(第10トレンチ出土)



4 磐園陵墓参考地出土品  
ミニチュア土器(第11トレンチ土坑1出土)



6 磐園陵墓参考地出土品  
瓦質挿鉢(第10トレンチ出土)



5 磐園陵墓参考地出土品  
磁器(第10トレンチ出土)



7 磐園陵墓参考地出土品  
紡錘車形石製品(第6トレンチ出土)